河原町埋蔵文化財調査報告書　第４集

鳥取県河原町
郷原遺跡発掘調査報告書

1986

鳥取県八頭郡河原町教育委員会

河原町埋蔵文化財調査報告書　第4集

鳥取県河原町
郷原遺跡発掘調査報告書

1986

鳥取県八頭郡河原町教育委員会

序　　文

本報告書は、県営八頭中央地区ほ場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の記録であります。

この遺跡が所在している郷原部落周辺は、以前における発掘調査（前田遺跡、郷原遺跡試掘調査）や、近接している古墳群などでも解かるように河原町内でも有数の埋蔵文化財分布地帯であり、古くから文化が開けていたことが窺われます。

今回の調査では、このような観点から調査を行ない、予想どおり多数の遺構・遺物を検出しました。改めて文化遺産の宝庫であるということを痛感するとともに調査により、郷原及び町の歴史が少しは解明されたのではないかと思われます。

今後は町の文化発展の為にも貴重な一資料として保存していく所存でございます。

調査にあたりまして、現地の関係者の方々に絶大なるご協力を頂き、また調査関係各位にご指導、ご助言を賜りましたことに対して深甚なる感謝を申し上げる次第であります。

昭和61年3月

河原町教育委員会

教育長　蓮　佛　金　吾

例　　言

1．本報告書は、河原町教育委員会が県営八頭中央地区ほ場整備事業に伴い、鳥取県八頭地方農林振興局から調査の依頼を受けて、昭和60年５月30日～８月23日の間に実施した鳥取県八頭郡河原町大字郷原に所在する埋蔵文化財発掘調査記録である。

2．調査関係者は次のとおりである。

調査団長　蓮佛金吾（河原町教育委員会教育長）

調査指導　野田久男（鳥取県埋蔵文化財センター調査指導係長）

　　絹見安明（鳥取県埋蔵文化財センター文化財主事）

調査委員　中村義秀（河原町文化財保護審議会会長）

　　有田研治（河原町文化財保護審議会副会長）

　　荻原伊三郎（河原町文化財保護審議会委員）

　　小谷憲一（河原町文化財保護審議会委員）

　　北村道之（河原町文化財保護審議会委員）

　　大熊一璞（河原町文化財保護審議会委員）

調 査 員　中島弘隆（河原町教育委員会）

調査協力　郷原部落

　　鳥取県埋蔵文化財センター

　　（作業関係者）有田研治、有田勝夫、有田はる子、有田節子、有田静子

　　有田敏江、藤原智恵子、有田由紀子

事 務 局　西尾繁雄（河原町教育委員会教育課長）

　　下田芳樹（河原町教育委員会教育課長補佐）

3．挿図中の方位は真北を示す。

4．挿図中の記号はＳＩ：竪穴住居跡、ＳＢ：掘立柱建物、ＳＫ：土坑、ＳＤ：溝、ＳＡ：柵列を表わす。

5．遺構の深さはすべて平均値をとったものである。

6．本書は、鳥取県埋蔵文化財センターの指導のもとに鳥取県埋蔵文化財センターの諸施設を利用して河原町教育委員会が編集作成した。

7．報告書作成にあたって中村　徹、久保穣二朗、絹見安明氏（鳥取県埋蔵文化財センター文化財主事）にご所見・ご教示を頂きましたことに厚く感謝いたします。

本 文 目 次

Ⅰ 位置と環境 …… 1

Ⅱ 調査に至る経過 …… 2

Ⅲ 調査の概要 …… 4

Ⅳ 調査の結果 …… 4

1．竪穴住居跡 …… 4

2．掘立柱建物 …… 15

3．土　坑 …… 25

4．溝 …… 26

5．柵　列 …… 28

6．遺構外の出土遺物 …… 29

Ⅴ ま　と　め …… 32

挿　図　目　次

挿図１　郷原遺跡周辺遺跡位置図……１
挿図２　郷原遺跡周辺地形図……３
挿図３　ＳＩ01遺構図……５
挿図４　ＳＩ02遺物実測図……６
挿図５　ＳＩ02遺構図……７
挿図６　ＳＩ03遺構図……９
挿図７　ＳＩ03遺物実測図……９
挿図８　ＳＩ04遺構図……10
挿図９　ＳＩ04遺物実測図……12
挿図10　ＳＩ05遺構図……13
挿図11　ＳＩ06遺構図……14
挿図12　ＳＩ06遺物実測図……14
挿図13　ＳＢ01遺構図……15
挿図14　ＳＢ02遺構図……16
挿図15　ＳＢ03遺構図……16
挿図16　ＳＢ04遺構図……17
挿図17　ＳＢ04遺物実測図……17
挿図18　ＳＢ05遺構図……17
挿図19　ＳＢ06遺構図……18
挿図20　ＳＢ07遺構図……18
挿図21　ＳＢ08遺構図……19
挿図22　ＳＢ09遺構図……20
挿図23　ＳＢ10遺構図……21
挿図24　ＳＢ11遺構図……22
挿図25　ＳＢ12遺構図……22
挿図26　ＳＢ13遺構図……23
挿図27　ＳＢ14遺構図……24
挿図28　ＳＢ14遺物実測図……24
挿図29　ＳＢ15遺構図……25
挿図30　ＳＫ01遺構図……26
挿図31　ＳＫ01遺物実測図……26
挿図32　ＳＤ01遺構図……27
挿図33　ＳＤ01遺物実測図……27
挿図34　ＳＡ01遺構図……28
挿図35　ＳＡ02遺構図……28
挿図36　出土遺物実測図（その１）……31
挿図37　出土遺物実測図（その２）……33

図　版　目　次

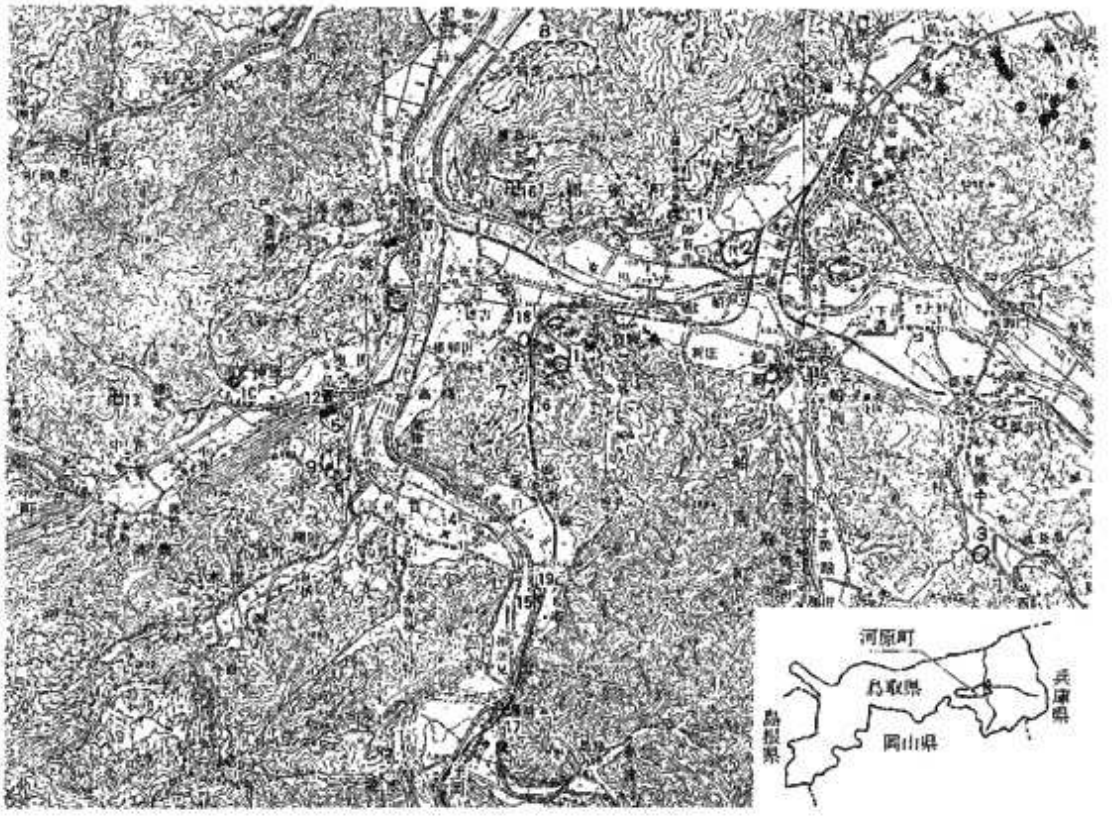
図版Ⅰ－１　遺跡全景（Ａ地区東から）
図版Ⅰ－２　遺跡全景（Ｂ地区南東から）
図版Ⅱ－１　遺跡周辺風景（南東から）
図版Ⅱ－２　発掘作業風景（Ａ地区）
図版Ⅲ－１　ＳＩ01（北西から）
図版Ⅲ－２　ＳＩ02（東から）
図版Ⅳ－１　ＳＩ03（北から）
図版Ⅳ－２　ＳＩ04（東から）
表１　郷原遺跡遺構一覧表……35
図版Ⅴ－１　ＳＩ05（南から）
図版Ⅴ－２　ＳＩ06（東から）
図版Ⅵ－１　ＳＢ04（南東から）
図版Ⅵ－２　ＳＫ01（北西から）
図版Ⅶ　出土遺物１
図版Ⅷ　出土遺物２
図版Ⅸ　出土遺物３
図版Ⅹ　出土遺物４
付図　郷原遺跡遺構図（Ａ調査区）
郷原遺跡遺構図（Ｂ調査区）

I 位置と環境

郷原遺跡は、鳥取県八頭郡河原町大字郷原に所在し、国鉄因美線沿線、千代川の支流三谷川の南岸で郷原部落の東側に位置している。当遺跡周辺は過去に実施された踏査等で埋蔵文化財周知ポイントとして既に地図に印されているところであり、町内でも有数の分布地帯である。

当遺跡が所在する河原町域の歴史・文化をみると、縄文・弥生文化に関する資料は、上土居遺跡・前田遺跡・下中溝遺跡等でそれぞれ数点の土器が確認された程度であり当時の様子を知ることには乏しい。

古墳時代になると、各地に古墳が築造され現在総数127基を数える。その内、曳田の撥古墳は全長50m と八頭郡内では最大規模を誇る前方後円墳である。そして当遺跡を中心とする東西南北には、前方後円墳を含む7基からなる郷原古墳群、箱式石棺の内部主体をもつ



挿図1　郷原遺跡周辺遺跡位置図

凡　例

- X 遺物出土地
- ◌ 散布地・集落跡
- ▲ 銅鐸出土地
- ◌ 古墳群
- 前方後円墳
- ● 円　墳
- ⊗ 窯　跡

1．郷原遺跡
2．万代寺遺跡
3．牧野遺跡
4．丸山遺跡
5．嶽 古 墳
6．郷原古墳群
7．山手古墳群
8．稲荷古墳群
9．大平古墳
10．天神原古墳跡群
11．土師百井廃寺跡
12．式内社荒沼神社
13．羽黒山妙玄寺跡
14．瓦経出土地
15．銅鐸出土地
16．桑 勝 寺
17．大安興寺
18．前田遺跡
19．下中溝遺跡

古墳・勾玉・銅鏡が出土した円墳など総数7基からなる山手古墳群、そして4基からなる加賀瀬古墳群があり、さらには霊石山支脈上北西側に総数75基からなる町内最大の稲常古墳群等、この時代が栄えていたことが窺える。また、千代川の支流曳田川をさかのぼった天神原、牛戸地区には、須恵器の窯跡が確認されている。

奈良・平安時代の遺跡からは、前田遺跡で掘立柱建物や、土師器・須恵器が数点検出され、下中溝遺跡では、当時の祭祀に使用したと思われる、土馬・獣形土製品が検出されている。

中世については、集落跡や遺物など当時の生活等を知ることが出来る資料が多く確認されている。中でも明和7年（1770）に発掘された中井字羽黒山妙玄寺跡の経塚遺物、八日市字滝谷出土の瓦経、釜口字西土居出土の銅鉦など寺院に関する文物が多く出土しており、また、前田遺跡出土の呪札等修験道信仰が盛んであったことが考えられる。

このようなことから、郷原遺跡は、数々の歴史・文化を知る上での資料が周辺で多く確認されていることなど、古くから文化・産業等多岐にわたって町の中枢として栄えていたところである。

Ⅱ　調査に至る経過

河原町・郡家町・船岡町の3町に及ぶ県営ほ場整備事業で、昭和52年度より実施されていた八頭中央地区として469haの農地区画整理の内、昭和60年度施工分（三谷工区）に伴う埋蔵文化財の発掘調査である。

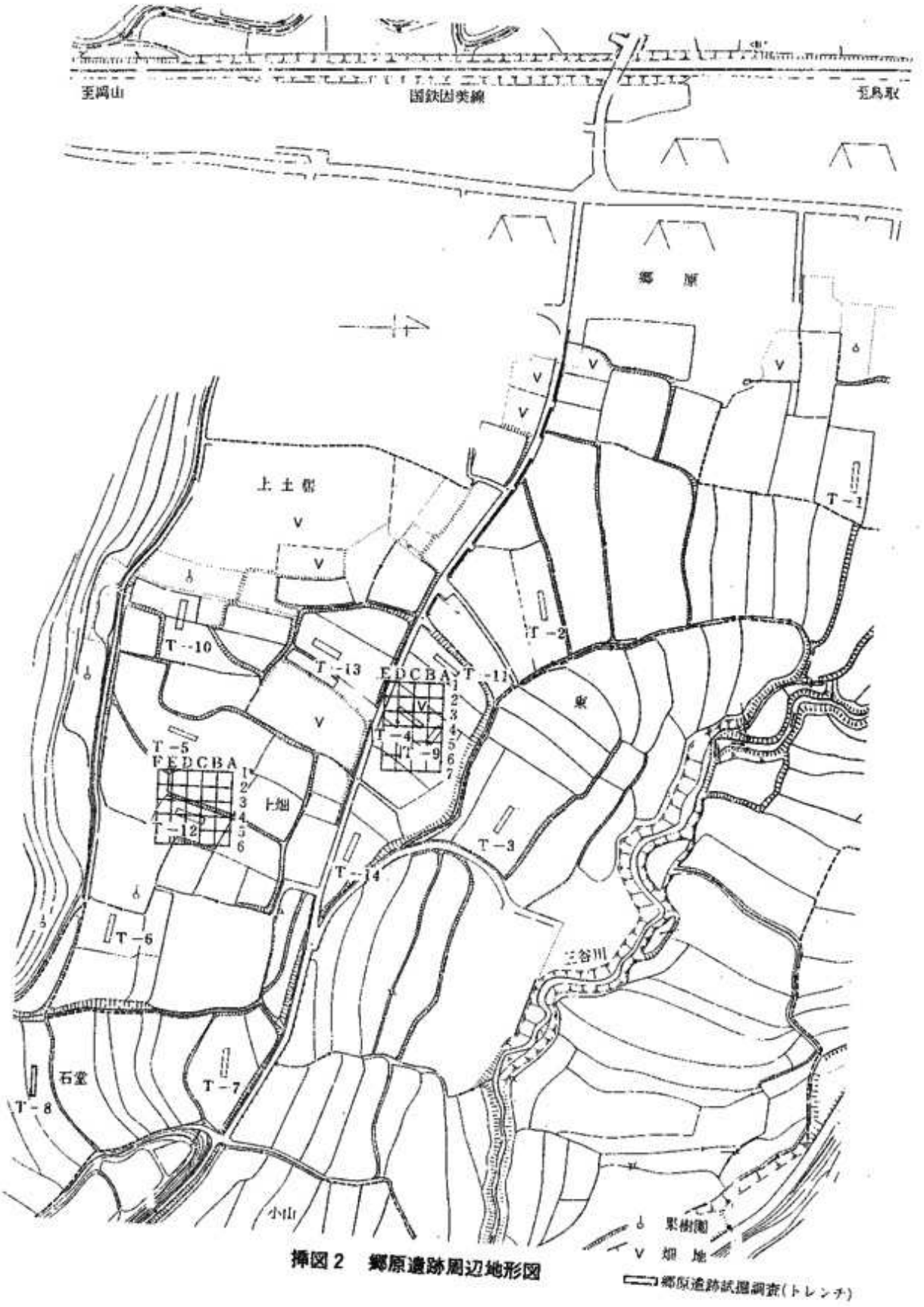
すでにこの工区内は、土師器・須恵器等多量の遺物散布地として周知されていたところで発掘調査は必至であった。そして、昭和59年度に試掘調査をする運びとなった。

試掘調査では、遺構の有無及び広がりを把握するため、鳥取県埋蔵文化財センターに現地調査を依頼し、14本のテストピット（トレンチ）を工区全域に設定した。

調査の結果、予想通り3調査区（3本のトレンチ）で、ピット（柱穴）及び土坑状遺構を確認し、遺物も検出した。そして本年度（昭和60年度）の本調査（発掘調査）を実施することに至った。

今回の調査は、ほ場整備事業で遺構に影響を及ぼさないように遺構検出場所と調整をはかり、約4,000㎡の調査範囲を決定し、鳥取県八頭地方農林振興局長から調査委託を受けて河原町教育委員会が昭和60年5月30日から8月23日まで行った。

また、調査区に隣接した前田遺跡（昭和57年度調査）との関連性など、郷原部落周辺の歴史究明の調査としても意味深い発掘調査である。



挿図2　郷原遺跡周辺地形図

Ⅲ 調査の概要

昭和59年度に実施した試掘調査で決定した調査面積は約4,000㎡で、調査区は東西に延びる農道を界に北側をA地区、南側をB地区と大別した。

A調査区には10m 間隔で基線杭を設定し、南北の軸をA～E、東西の軸を1～7とした。B調査区も同じく10m おきに基線杭を設定し、南北の軸をA～F、東西の軸を1～6とした。そして、それぞれの軸が交差する点の北西側区画（10m ×10m ）を小調査区とする。（exA－1）基線杭は真北方向をとる。

調査は昭和60年5月31日からA地区で約20cmの表土の除去から実施した。そして黄褐色ローム層から大小様々のピット（柱穴）を多数確認した。

調査の結果、竪穴住居跡、土坑及び掘立柱建物を検出した。遺構の分布状況は西域にピットが集中し、竪穴住居跡は北域から東域にかけて検出された。

B調査区は北域から耕土、床土の除去を行ったが、北域の緩やかな地形に比べて南域の谷あいであったと思われる場所は掘り進むにつれて極端に傾斜が急になり、相当の埋土量で、また水も湧出したのでほ場整備事業に影響がないということで予定よりも調査範囲を縮小した。

調査の結果、竪穴住居跡、掘立柱建物、柵列及び溝を検出した。また、北西域にはピットが極少であったのに対して、南東域には大規模ピットが多く確認された。

Ⅳ 調査の検果

今回の調査では、竪穴住居跡6棟、掘立柱建物15棟、土坑1基、溝1基、柵列2基を検出した。

1 竪穴住居跡（SI）

A調査区で4棟、B調査区で2棟をそれぞれ検出した。遺構の規模は均一でなく、平面形も円・方形など様々で、多量に出土した遺物も多種多様である。時期は出土遺物で見る限り、弥生時代後期後半から古墳時代初頭にかけてのものでそれぞれが隣接するようなかたちで検出された。

SI01〔挿図3、図版Ⅲ－1〕

A地区の北部に位置し、SK01の北東側に所在する。住居西側部分は緩やかな傾斜地のため上面が流失し原形を留めていなかった。平面形は残形から隅丸方形と思われ、長軸5.13m 、短軸2.10m 、深さ0.17m を測り、主軸をN－60°－Eにとる。床面中央部で赤褐色の焼土を検出した。出土遺物は細片になっており、図化できるものはなかったが時期は古墳時代初頭であろう。

ＳＩ02〔挿図５、図版Ⅲ－２〕

Ａ地区最北部に位置し、ＳＩ01の東側、ＳＩ03の北西側に所在している。平面形は隅丸方形で長軸7.56m、短軸7.54m、深さ0.52mを測り、主軸をＮ－10°－Ｗにとる。住居北部は流出したようなかたちで消失している。床面中央部に方形二段の特殊ピットを検出したが、ピット内外で確認された焼土、炭化物等により竈と推測される。また住居南東部壁際で炭を検出した。

ＳＩ02出土遺物

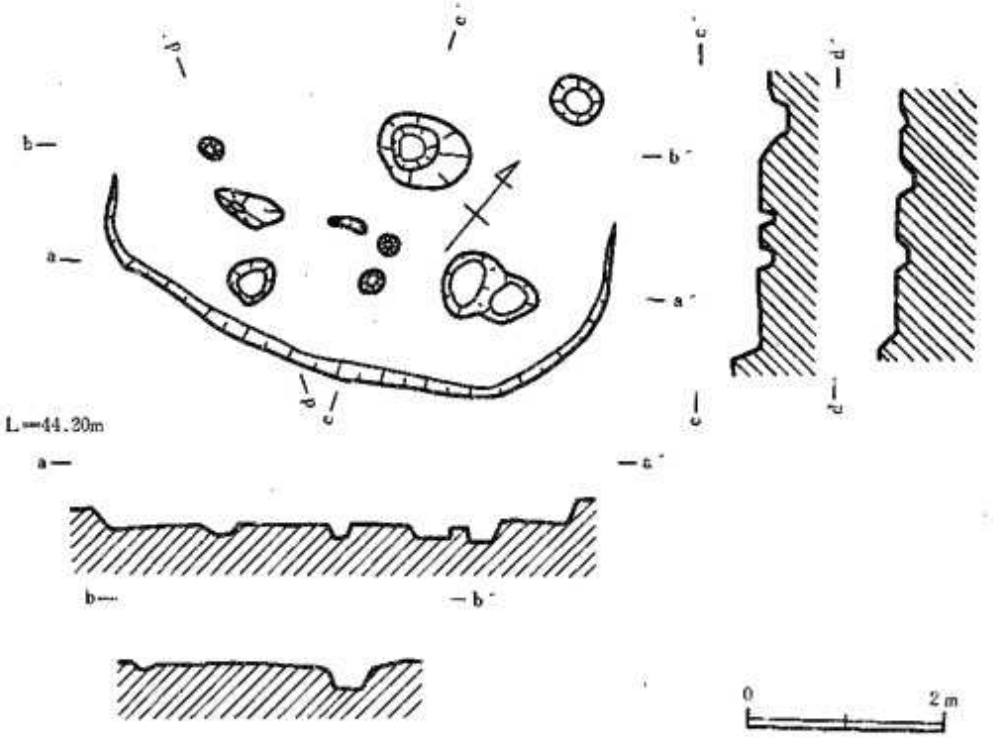
覆土中から弥生時代後期後半の土器、床面・柱穴からは古墳時代土師器・甕・壺・高坏等が出土している。

(1) 覆　土

甕〔挿図４－１、図版Ⅶ－１〕 １は複合口縁を呈し、口縁部外面には櫛状工具による平行沈線を施している。頸部以下内面は横方向にヘラ削りする。復元口径21.9cm。

(2) 床面・柱穴

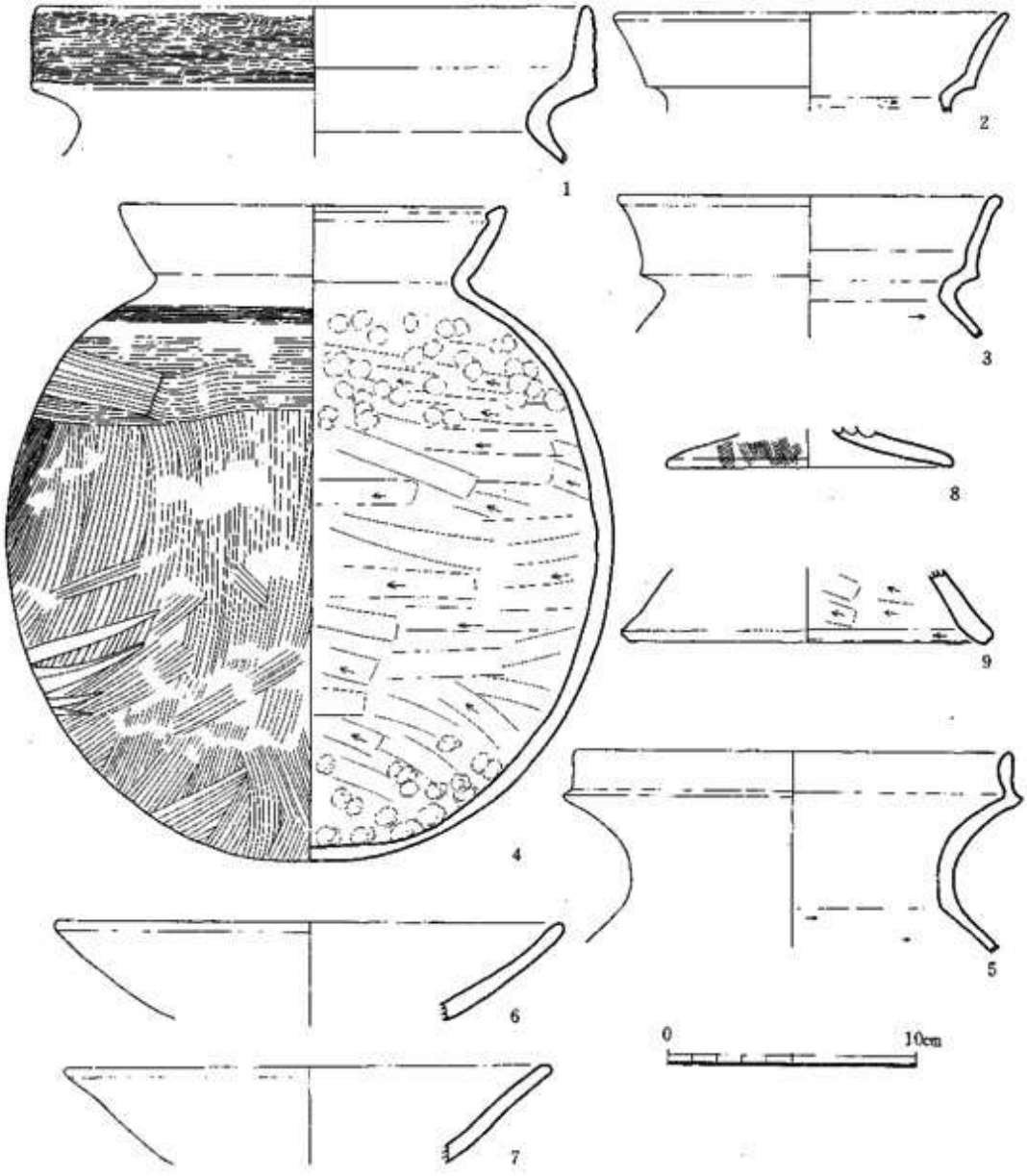
甕〔挿図４－２～４、図版Ⅶ－２・３〕 ２・３は複合口縁を呈し、２の端部は横ナデによって丸く調整されており、３は水平方向に引き出されている。４は頸部が「く」の字状



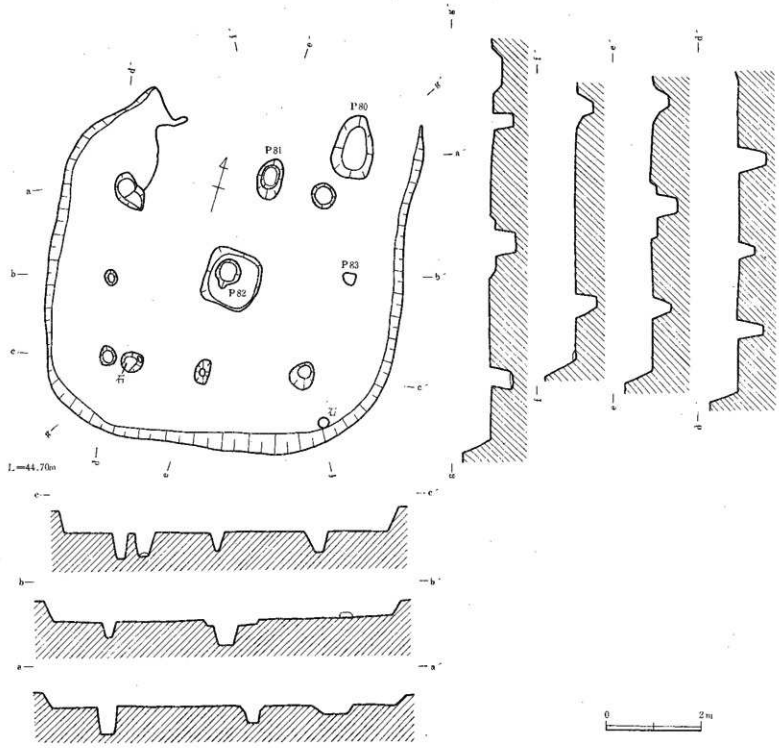
挿図３　ＳＩ01遺構図

に屈曲し、口縁部は内湾気味に外傾、その端部は内側に肥厚する。胴部は円形を呈する。胴部外面はハケメ調整を施し、肩部には櫛状工具による平行沈線を施すが、みだれている。内面は斜目・横方向にヘラ削り、肩部・底部には指圧痕が顕著である。復元口径2は15.6cm、3は15.0cm。4は口径15.4cm、高さ26.4cmである。

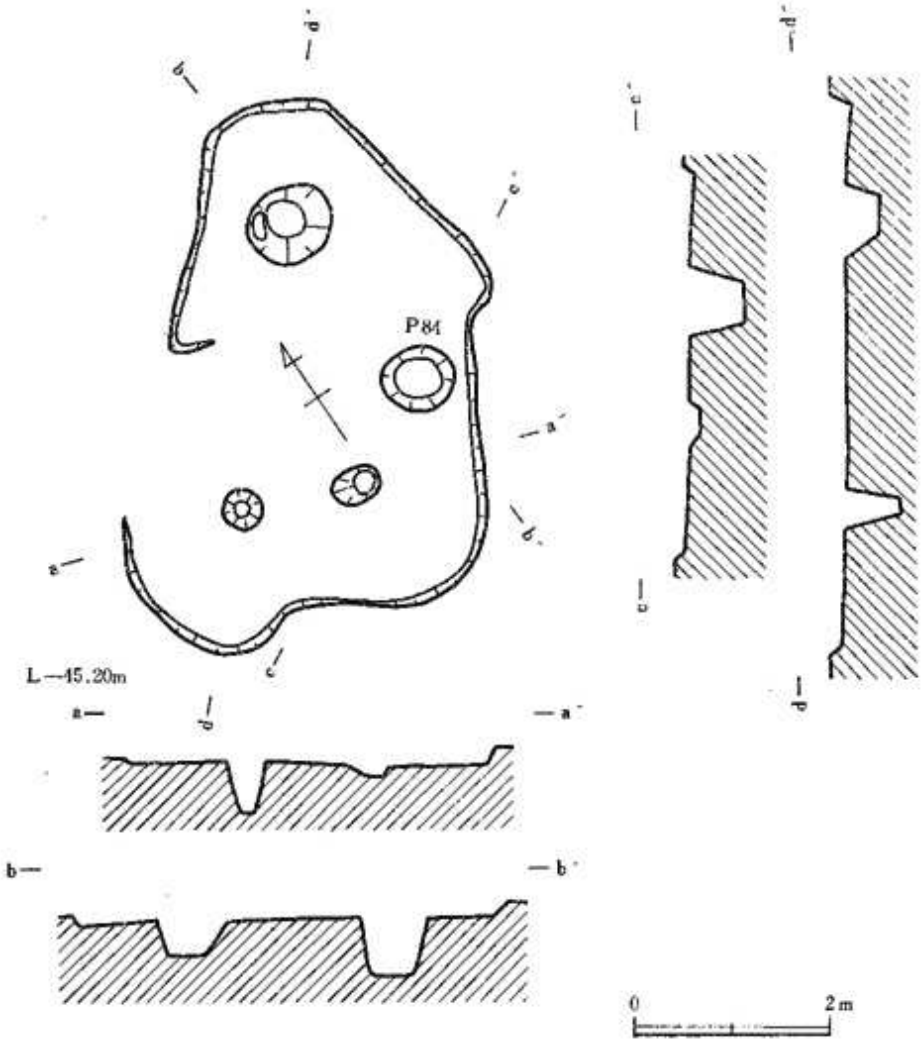
壺〔挿図4－5、図版Ⅶ－5〕 5は口縁部が直立する複合口縁を呈し、その端部は丸い。内面肩部以下は横方向にヘラ削りする。なお、外面及び頸部内面から口縁部にかけて、赤色塗彩されている。復元口径17.4cm，P83出土。



挿図4　S I 02遺物実測図



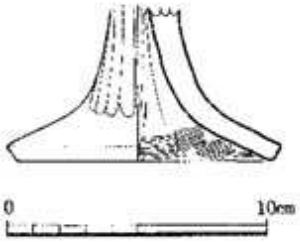
挿図5　S I 02遺構図



挿図6　S I 03遺構図

高坏〔挿図4－6・7、図版Ⅶ－6・7〕 坏部が内湾気味に外傾するもの(6)と直線的に外傾するもの(7)がある。6は赤色塗彩されている。6はP83出土、復元口径20.2cm。7は復元口径19.2cm。

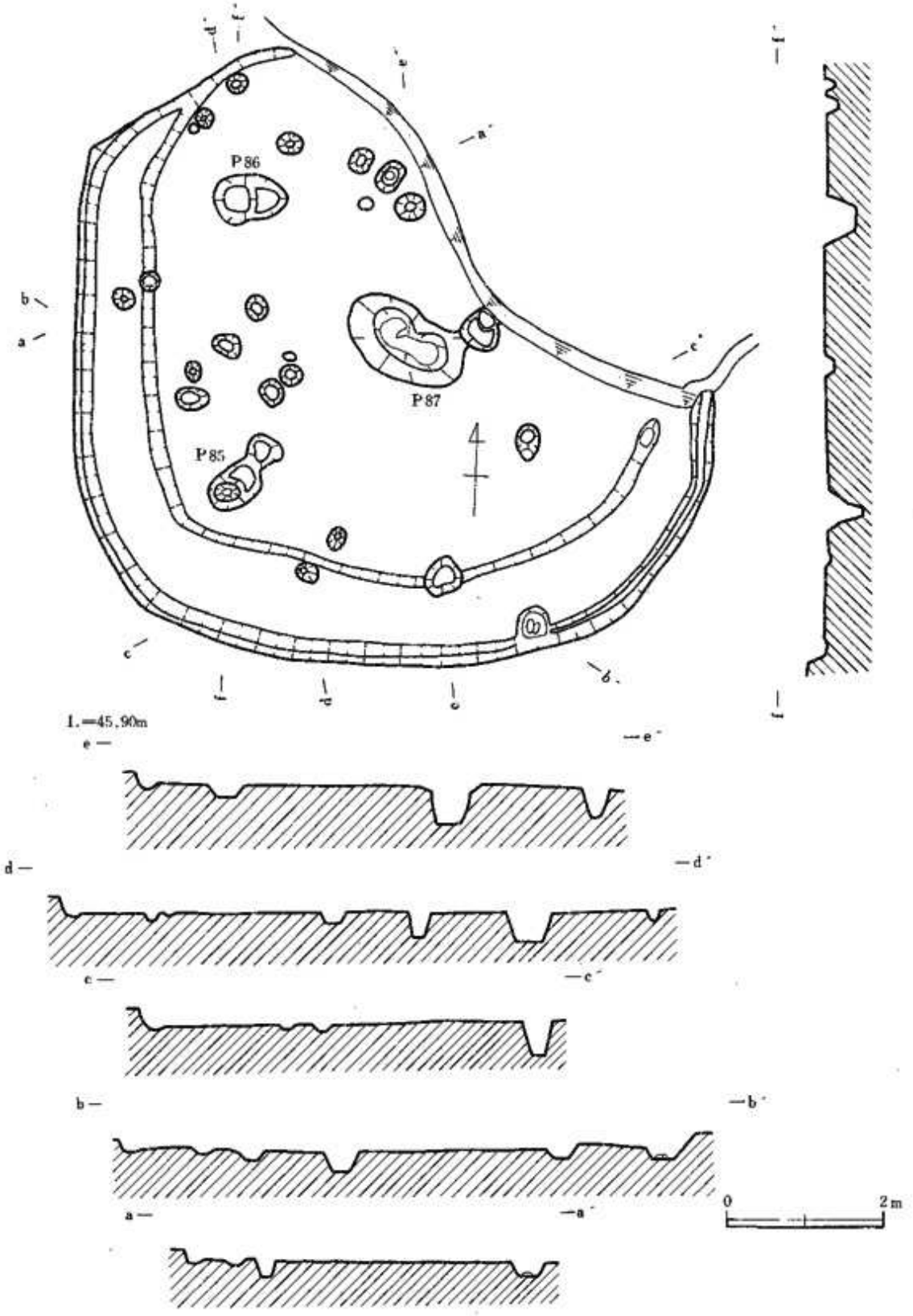
その他の遺物〔挿図4－8・9、図版Ⅶ－8・9〕 高坏(?)の脚部破片(8・9)がある。9の内面にはヘラ削りなどが観察され、弥生土器の可能性もある。復元脚径8は11.4cm。9は14.3cm。いずれもP83出土。



挿図7　S I 03遺物実測図

S I 03〔挿図6、図版Ⅳ－1〕

A地区北から北東部にかけて位置し、S I 02の南東側、SB11の北東側に所在して、S



挿図8　S I 04遺構図

B10と共有している。平面形は不整形で、長軸5.18m、短軸3.10m、深さ0.18mを測り、主軸をN—57°—Eにとる。全体的に上面が削られて浅く、北西部は消失している。SB10に囲まれるようなかたちで検出され、住居北東部ピットはSB10の桁行柱穴の一部と考えられる。

SI03出土遺物

古墳時代土師器・甕・壺・高坏等の小片が多く出土したが、図化できるものは覆土中から出土した高坏だけである。

高坏〔挿図7、図版Ⅶ—10〕 脚部破片で筒部から裾部にかけて「ハ」の字状に開く。脚端部はカットされている。内面裾部はラセン状にハケメを施し、筒部はシボリ目が見られる。外面筒部はヘラ磨きを施し、一部赤色塗彩が見られる。また、筒部中央に径8mmの小孔がある。復元脚径9.3cm。

SI04〔挿図8、図版Ⅳ—2〕

A地区南東部に位置し、SB06・SB07の南東側に所在している。平面形はやや円形を帯びた隅丸方形を呈し、長軸8.18m、短軸8.14m（推定)、深さ0.23mを測り、主軸をN—1°—Wにとる。住居内には測溝と1.30m内側に溝がめぐっているが、深さは極浅で覆土状況等から同時期に存在したものではなく、建替えに伴って拡張したものと考えられる。また、北から東側にかけての部分は、調査除外地のために遺構の全容は不明である。覆土内で多量の石が出土し、床面に近い覆土に土師器の小片が多く含まれていた。

SI04出土遺物

覆土中・床面・柱穴より弥生時代後期後半頃の甕・壺・器台・鉢等が出土した。図化したものは床面近くや柱穴出土のものに限った。

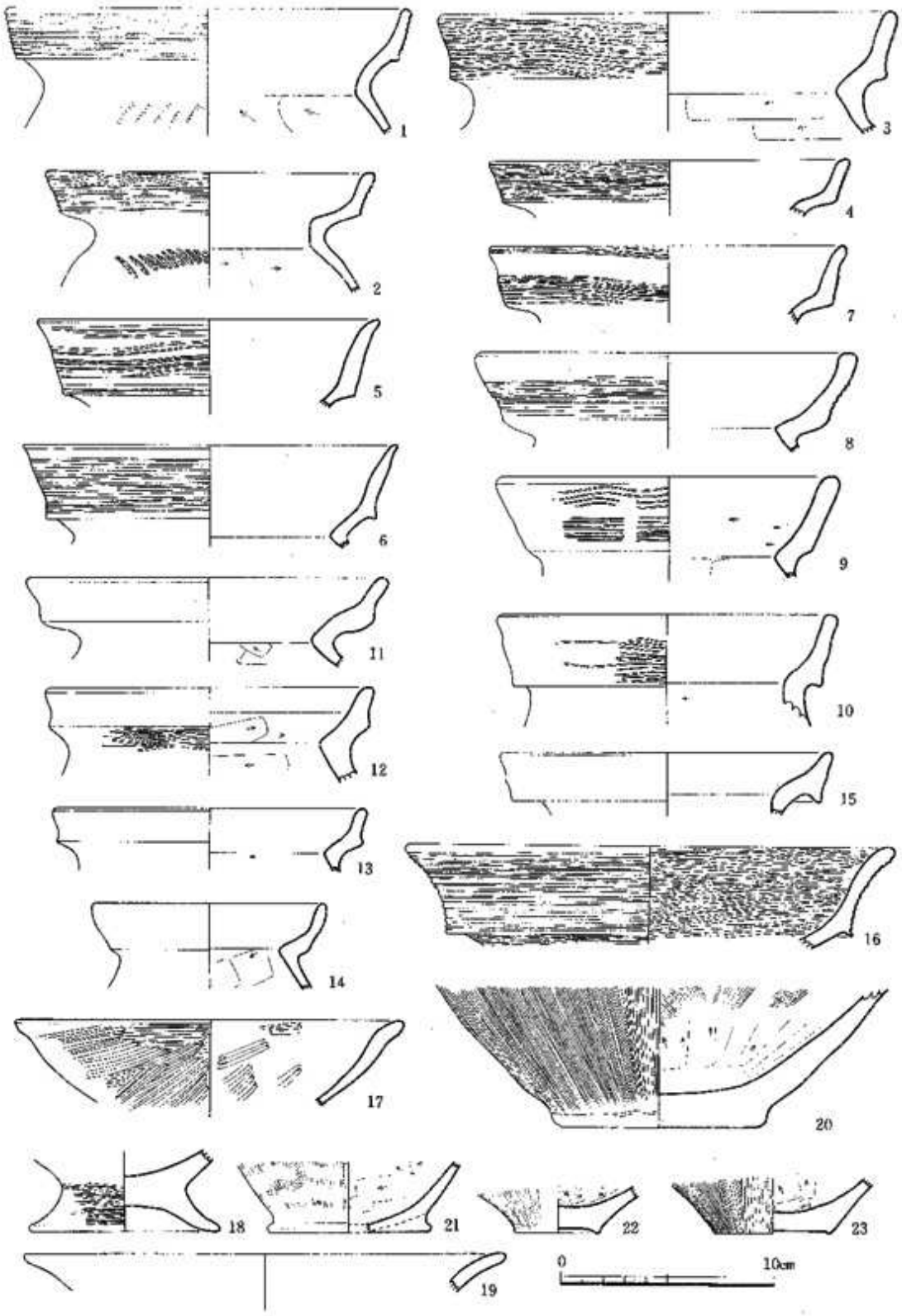
甕〔挿図9—1～14、図版Ⅷ—1～14〕 口縁部が複合口縁、頸部以下は横方向にヘラ削りするものである。口縁部外面には櫛状工具などによる平行沈線を施すものAタイプ（1～8）と施さないものBタイプ（11～14）がある。

Aタイプには横ナデによって平行沈線が一部ナデ消されているものもある（5～10)。また、2・4・10の口縁部内面のヘラ磨き調整は横ナデ調整によって一部ナデ消されている。

器形的には、口縁部が内湾気味のもの（8・9)、端部が外傾するもの（5・6）があるが、全般に端部は丸く調整されている。なお、1・2の肩部には二枚貝の腹縁による押圧紋ないしは押し引き紋が観察できる。1はベンケイガイ、2はサルボウガイ(註1)と推定される。

復元口径は1は18.5cm、2は15.1cm、3は21.1cm、4は16.6cm、5は15.8cm、6は17.3cm、7は16.5cm、8は17.5cm、9は15.7cm、10は15.7cm、5・6はP86出土である。

Bタイプは口縁部が強く横ナデされ、内外面に凹みを呈するのが特徴である。その結果、)



挿図9　S I 04遺物実測図

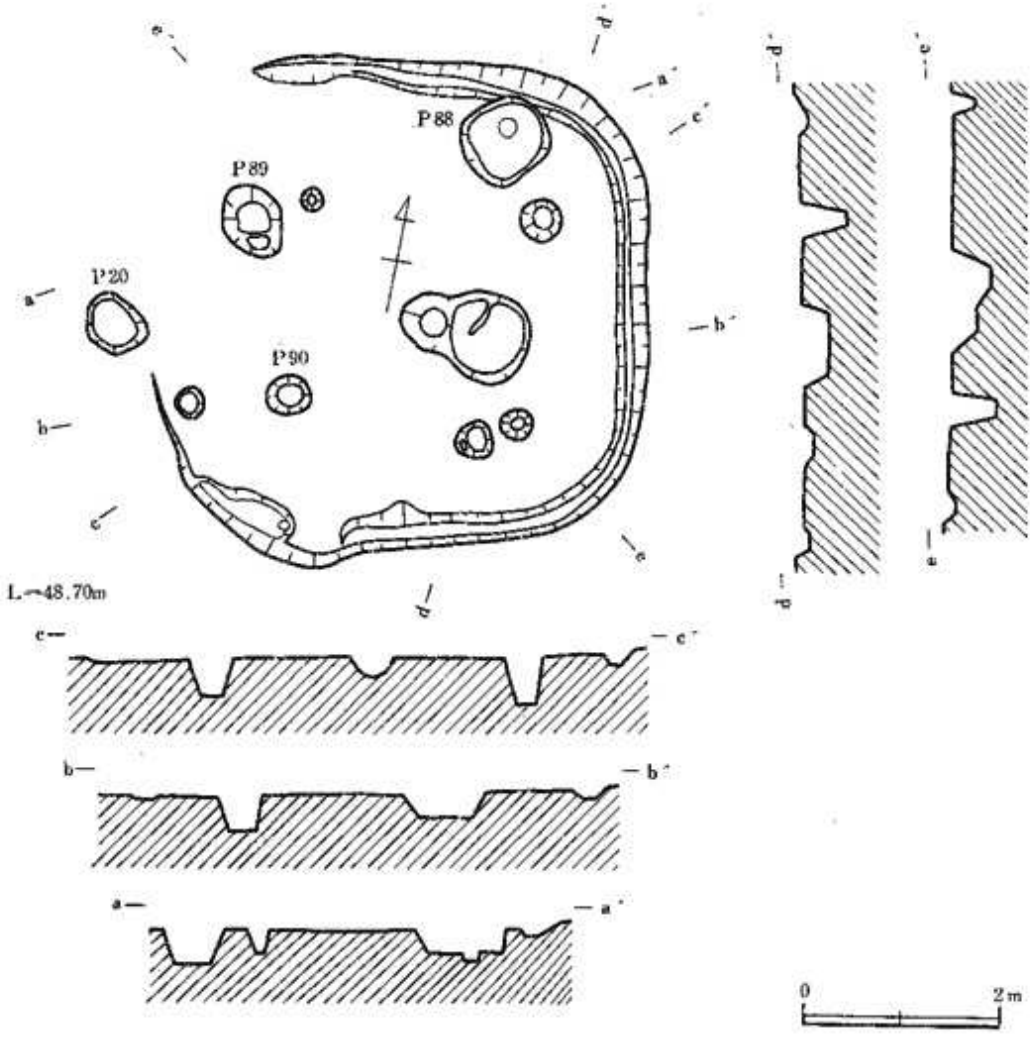
14のように内湾する器形のものもある。

復元口径は11は16.6cm、12は15.0cm、13は14.5cm、14は10.8cm。なお、頸部以下の横方向のヘラ削りは逆時計回り（土器を上方から見て）方向が多いようである。また、11・12・14は口縁部内面にヘラ磨き調整が一部観察できる。

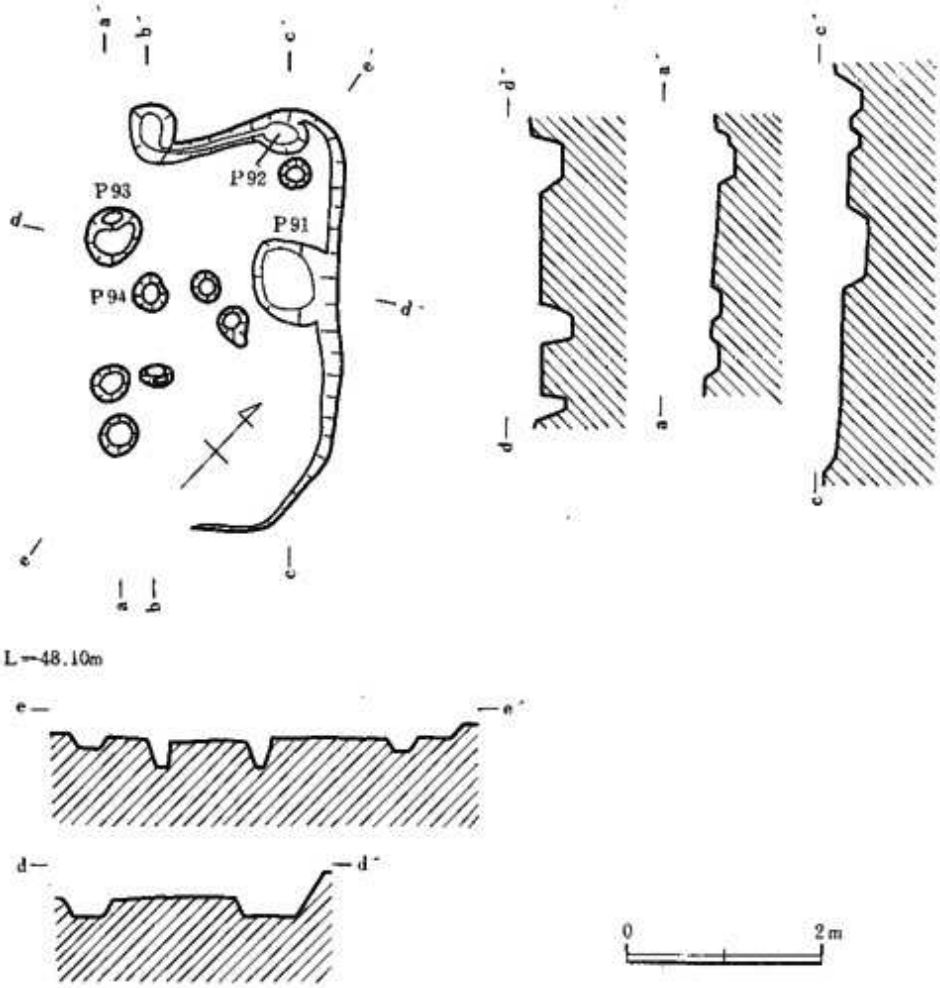
壺〔挿図9—15、図版Ⅷ—15〕 15は複合口縁で屈曲部は垂下している。内外面は横ナデ調整である。復元口径は15.4cm。なお、甕の範疇に入れているもので、壺に入るものもあると思われるが、明確に区別できなかった。

器台〔挿図9—16、図版Ⅷ—16〕 16は、いわゆる鼓形器台と考えられるもので、受部は外方に大きく開き、複合口縁状を呈する。外面には櫛状工具による平行沈線が多条に施されている。なお、内外面はよくヘラ磨きされている。復元口径は22.7cm。

鉢〔挿図9—17、図版Ⅷ—17〕 17は内外面はよくヘラ磨きされており、端部が肥厚する



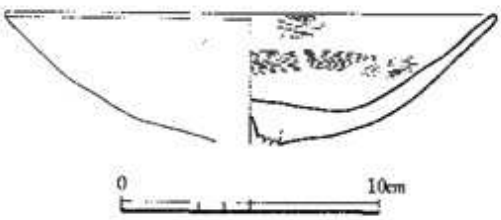
挿図10　S I 05遺構図



挿図11　ＳＩ06遺構図

浅い鉢と考えられる。復元口径17.9cm。

その他の遺物〔挿図９—18～23、図版Ⅷ—18～23〕 器種不明の脚部破片18・口縁部破片19・座部破片20～23がある。内面にヘラ削りが観察できる。19は復元口径22.4cmでＰ87出土である。



挿図12　ＳＩ06遺物実測図

ＳＩ05〔挿図10、図版Ⅴ—１〕

Ｂ地区南部に位置し、ＳＩ06の東側でＳＢ13の柱穴と共有する。ＳＡ01・ＳＡ02に挟まれるような形で所在している。平面形は隅丸方形で、長軸5.03m、短軸5.00m、深さ0.18mを測り、主軸をＮ—10°—Ｅにとる。住居壁際に側溝がめぐっているが、北西側は消失している。中央部特殊ピットから炭を多く含んだ焼土を検出した。竈の役割を果たしたピッ

トであろう。出土遺物は、土師器の甕・壺と思われる破片が出土したが、極細片で図化できるものはなかった。出土遺物から時期は古墳時代終末であろう。

ＳＩ06〔挿図11、図版Ⅴ－２〕

Ｂ地区最南端に位置し、ＳＢ09南東側、ＳＩ05・ＳＡ02の西側に所在している。平面形は西から南側部分が流出したようなかたちで消失しているが、隅丸方形と推測され、長軸4.23m、短軸2.08m、深さ0.14mを測り、主軸をＮ－44°－Ｗにとる。

ＳＩ06出土遺物

甕・壺・高坏・器台など多量の小片と用途不明木片を出土したが、図化できたものはＰ93出土の１点である。

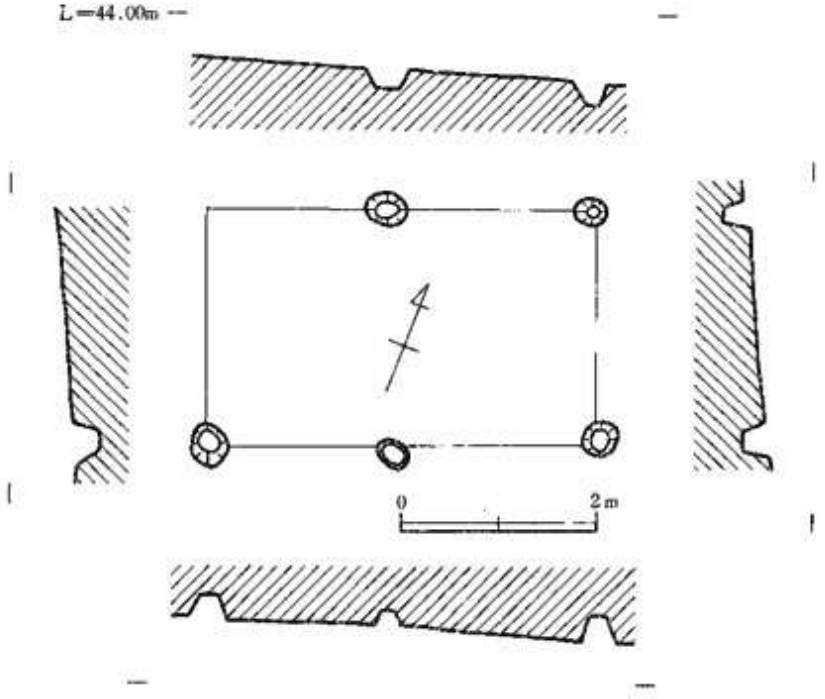
高坏〔挿図12、図版Ⅸ－５〕 坏部破片で内湾気味に立ち上がる。内面ハケメ調整し、外面は磨滅が著しく調整不明である。外面中央に径５mmの小孔があり、高坏脚部差込式である。内外面に赤色塗彩を施している。復元口径19.0cm。

２　掘立柱建物（ＳＢ）

全体で15棟の掘立柱建物を検出した。内訳はＡ地区で11棟、Ｂ地区で４棟である。規模は１×１間１棟、１×２間10棟、２×２間２棟、４×２間１棟、４×３間１棟で比較的規模の小さいものが主である。

ＳＢ01〔挿図13〕

桁行２間（3.94～4.03m）×梁行１間（2.35～2.38m）の建物で、桁行方向はＮ－68°－



挿図13　ＳＢ01遺構図

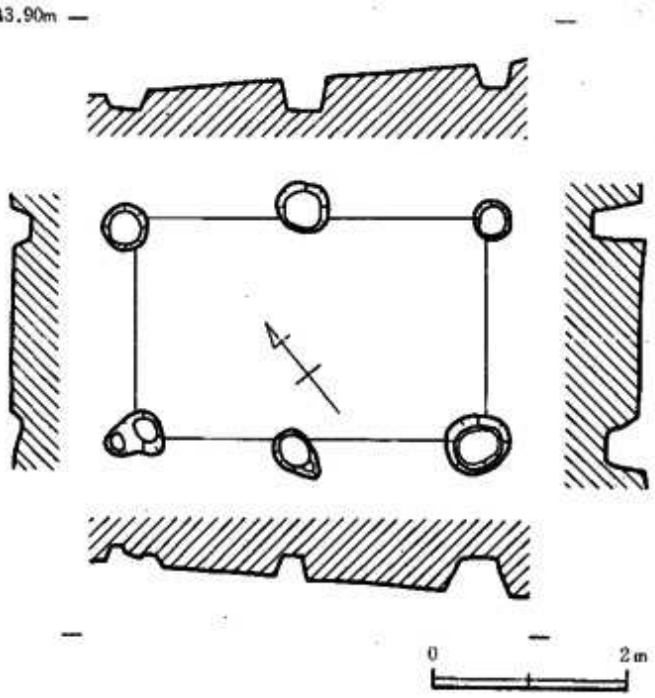
Eをとる。柱穴は径0.24～0.46m、深さ0.14～0.27mを測り、径、深さともに均一である。北西桁行の隅柱を欠くが、柱間は等間隔である。

ＳＢ02〔挿図14〕

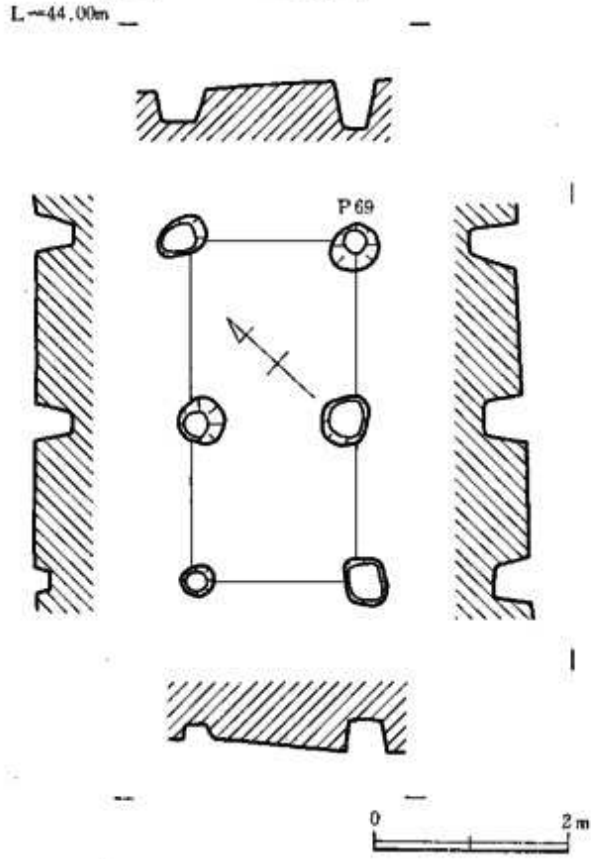
桁行２間（3.51～3.80m）×梁行１間（2.13～2.32m）の建物で、ＳＢ01の北東側に所在する。主軸は桁行方向をN－51°－Wにとる。柱穴は円形が主で径0.32～0.65m、深さ0.11～0.32mを測る。また、南西桁行の隅柱は複孔である。全体に柱筋・柱間ともに揃っている小規模の建物である。

ＳＢ03〔挿図15〕

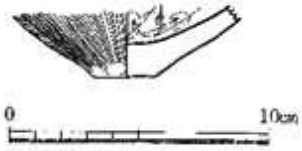
桁行２間（3.54～3.55m）×梁行１間（1.72～1.84m）で、桁行方向をN－47°－Eにとり、主軸がＳＢ02とほぼ垂直に交わる建物。柱穴は径0.29～0.55m、深さ0.16～0.49mを測る。Ｐ69から土師器（甕）・瓦質陶器（器種不明）が出土している。平安時代終末の建物であろう。



挿図14　ＳＢ02遺構図



挿図15　ＳＢ03遺構図



挿図17　ＳＢ04遺物実測図

ＳＢ04〔挿図16、図版Ⅵ－1〕 桁行２間（3.82～3.94m）×梁行１間（2.32～2.42m）の建物で、ＳＩ01の南側、ＳＫ01の東側に所在する。桁行方向をＮ－42°－Ｗにとり、柱穴は径0.35～0.76m、深さ0.10～0.43mを測る。それぞれの桁行は平行に溝を掘り建てられている。

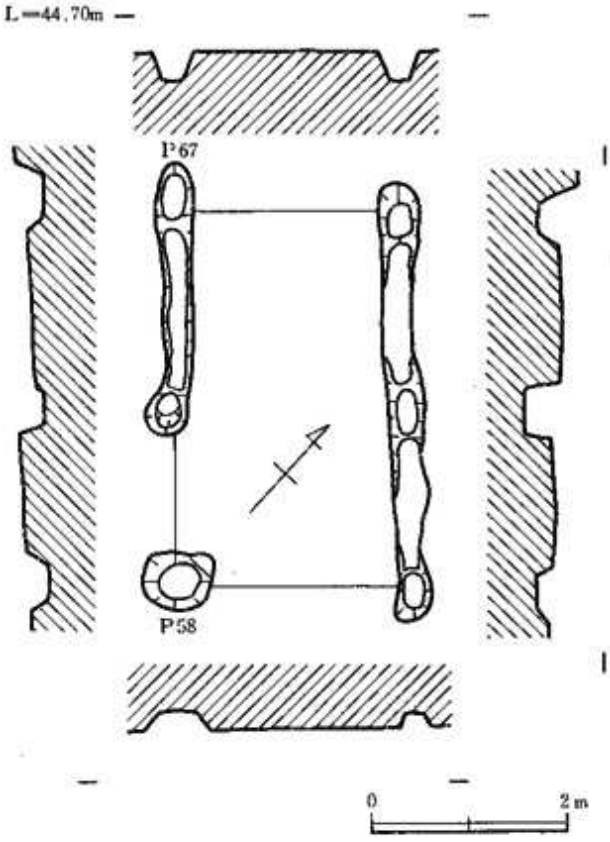
ＳＢ04出土遺物

Ｐ58から器種不明（底部）、Ｐ67から弥生土器（器台）がそれぞれ１点出土している。

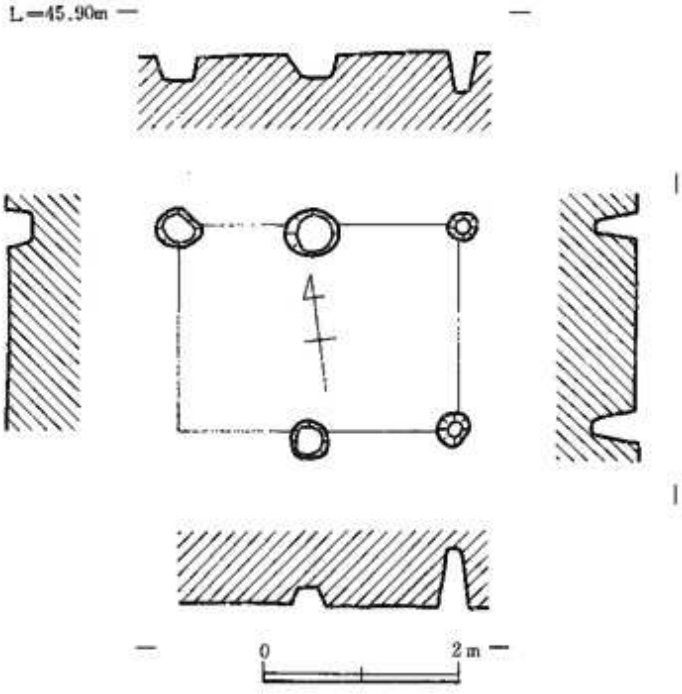
底部〔挿図17、図版Ⅶ－11〕 平底であるが底径2.3cmと小さい。内面はヘラ削りで指圧痕が見られる。外面はハケメ調整のち底部にかけてナデている。出土遺物から弥生時代の建物であろう。

ＳＢ05〔挿図18〕

桁行２間（2.81～2.



挿図16　ＳＢ04遺構図

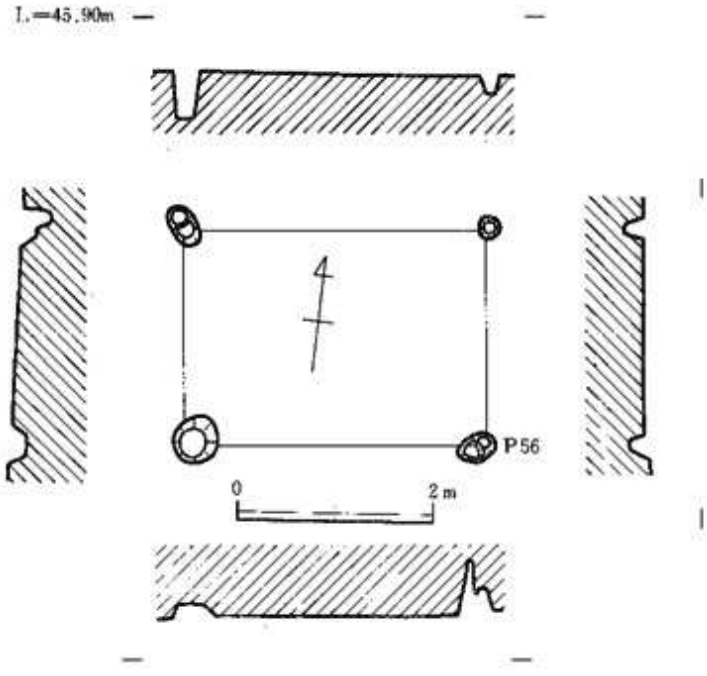


挿図18　ＳＢ05遺構図

91m）×梁行1間（2.08m）で、桁行方向をN—82°—Wにとる建物。柱穴は径0.27～0.55m、深さ0.17～0.66mを測る。北桁行の隅柱を欠く。

SB06〔挿図19〕

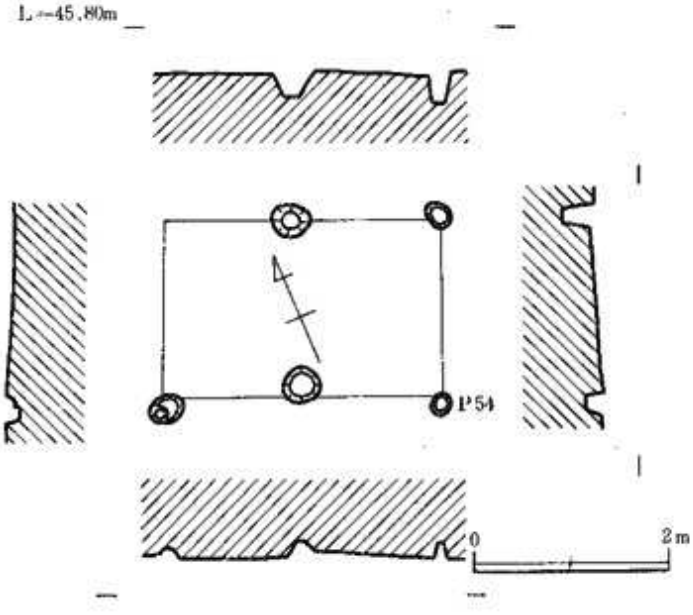
桁行1間（2.92～3.12m）×梁行1間（2.24～2.26m）で、桁行方向をN—83°—Eにとる建物。SI04の西側に所在する。柱穴は径0.20～0.50m、深さ0.13～0.36mを測り、それぞれ桁行の隅柱は複孔で互いに切り合っている。径・深さともにバラツキが認められる。P56から古墳時代前期の土師器高坏が出土している。



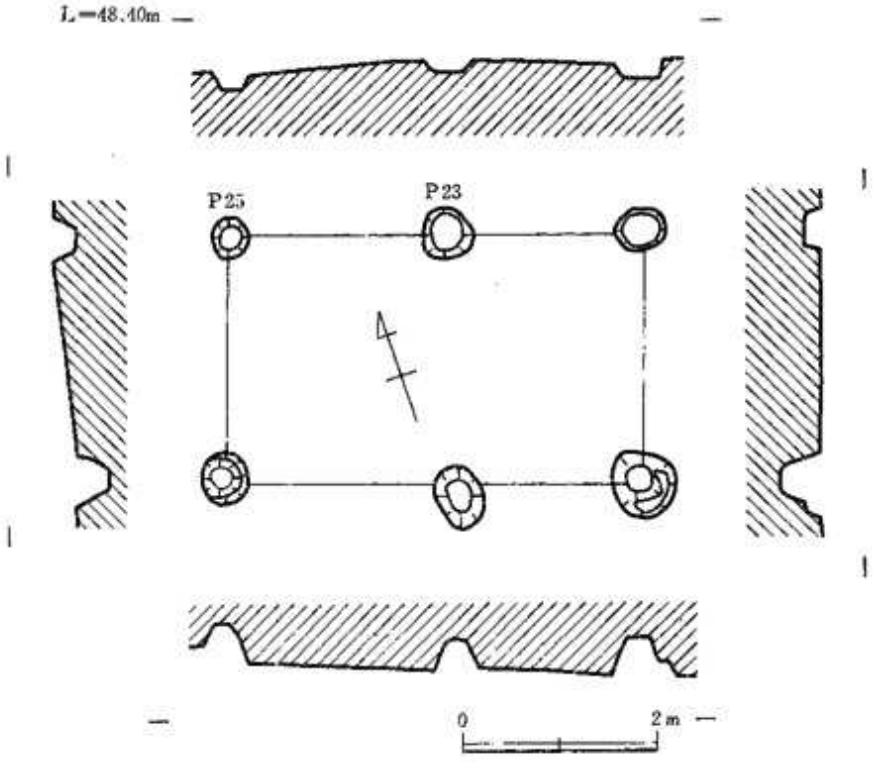
挿図19　SB06遺構図

SB07〔挿図20〕

桁行2間（2.82～2.86m）×梁行1間（1.93～1.94m）で、桁行方向をN—67°—Wにとり、SI04の北西側に位置する建物。柱穴は径0.17～0.40m、深さ0.06～0.31mを測る。北東桁行の隅柱を欠き、柱筋も不揃いで、本遺跡最小規模の建物である。P54から土師器（甕）、須恵器（蓋）が出土している。古墳時代の建物であろう。



挿図20　SB07遺構図



挿図21　ＳＢ08遺構図

ＳＢ08〔挿図21〕

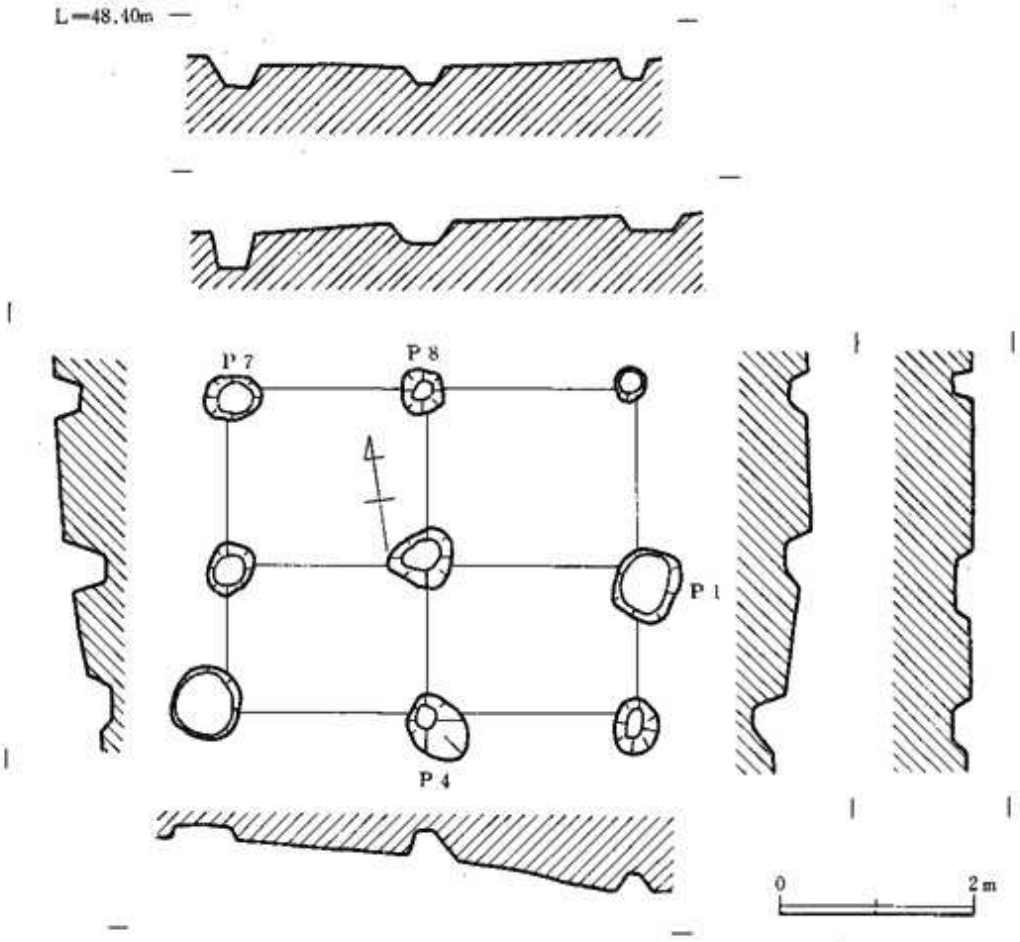
桁行２間（4.19～4.29m）×梁行１間（2.46～2.56m）で、桁行方向をＮ—62°—Ｗにとる建物。柱穴は、ほぼ円形を呈し、径0.37～0.71m、深さ0.08～0.39m を測る。Ｐ23から須恵器（皿）、Ｐ25から土師器（甕・高坏）が出土している。古墳時代の建物であろう。

ＳＢ09〔挿図22〕

桁行２間（4.08～4.42m）×梁行２間（3.27～3.57m）で、桁行方向をＮ—81°—Ｗにとる総柱建物である。ＳＢ08の南側、ＳＩ06の北西側に所在している。柱穴はやや不整形を呈し、径0.31～0.80m、深さ0.15～0.37m を測る。柱間・柱筋は多少のバラツキが認められる。Ｐ１から差込式の土師器高坏（赤色塗彩を施す）、Ｐ４から土師器（坏）・須恵器（甕・坏）、Ｐ７から土師器（不明）、Ｐ８から土師器（甕）が出土している。平安時代初期の建物であろう。

ＳＢ10〔挿図23〕

桁行４間（8.25m）×梁行３間（5.49m）で、桁行方向をＮ—76°—Ｗにとり、東面に廂が付く建物。ＳＩ02の南東側、ＳＢ11・12・15の北側でＳＩ03を囲むように所在している。柱穴はほぼ円形を呈し、径0.63～1.21m、深さ0.23～0.93m を測る大規模ピットであり、複孔をもつものが多い。西梁行の柱穴と東梁行の北隅柱、廂の北隅柱をそれぞれ欠く。柱



挿図22　ＳＢ09遺構図

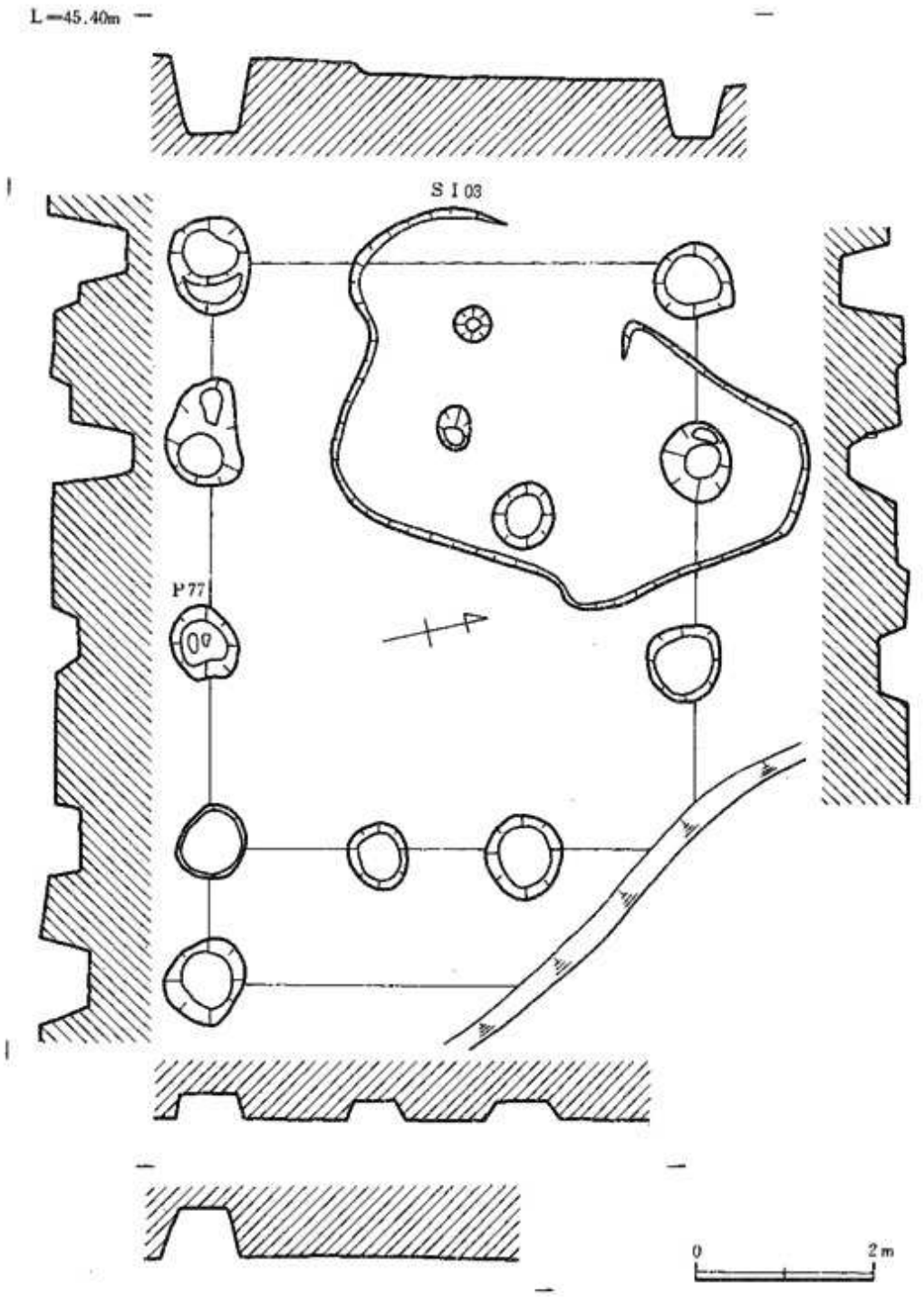
間、柱筋はほぼ揃っている。北側部分が調査除外地のため全容は解からないが、本遺跡最大級の建物であろう。Ｐ77から土師器（不明）が出土している。

ＳＢ11〔挿図24〕

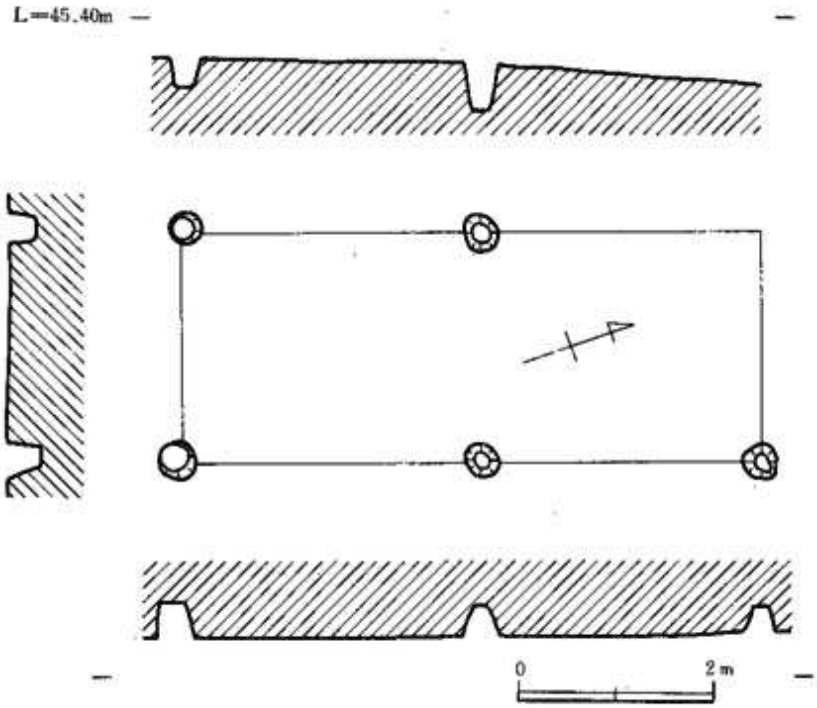
桁行２間（5.90～6.01m）×梁行１間（2.01～2.36m）で、桁行方向はＮ－19°－Ｅをとる建物。ＳＩ02・ＳＩ03の南側に位置している。柱穴は円形で径0.31～0.40m、深さ0.29～0.39mを測る。西桁行の隅柱を欠くが、柱間は等間隔で柱筋も揃っている。東桁行隅柱はＳＢ15の北西桁行隅柱と共有する。

ＳＢ12〔挿図25〕

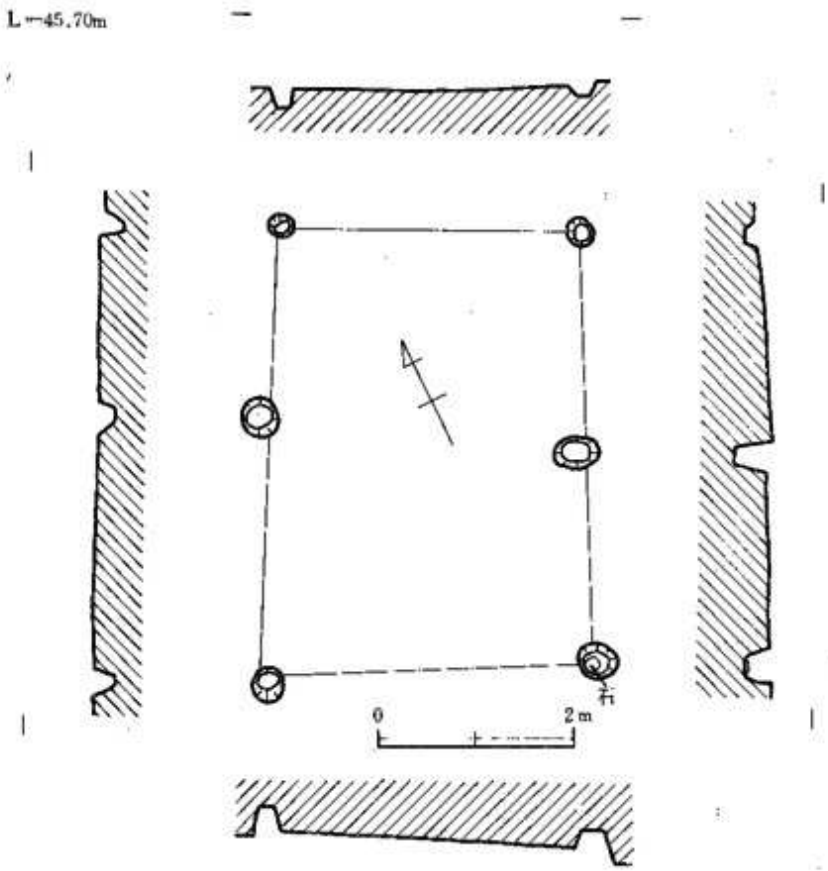
桁行２間（4.42～4.68m）×梁行１間（3.06～3.38m）で桁行方向をＮ－27°－Ｅにとり、ＳＢ11の東側に平行なかたちで所在している建物。柱穴は円形で径0.23～0.46m、深さ0.12～0.29mを測り、柱間は等間隔でない。東桁行隅柱穴は底石をもち、ＳＢ15の北東桁行隅柱穴と共有する。また、西桁行の中間柱穴はＳＢ15の北桁行の北隅柱穴、そして西桁行の南隅柱穴はＳＢ15の南西桁行の中間柱穴とそれぞれ共有する。



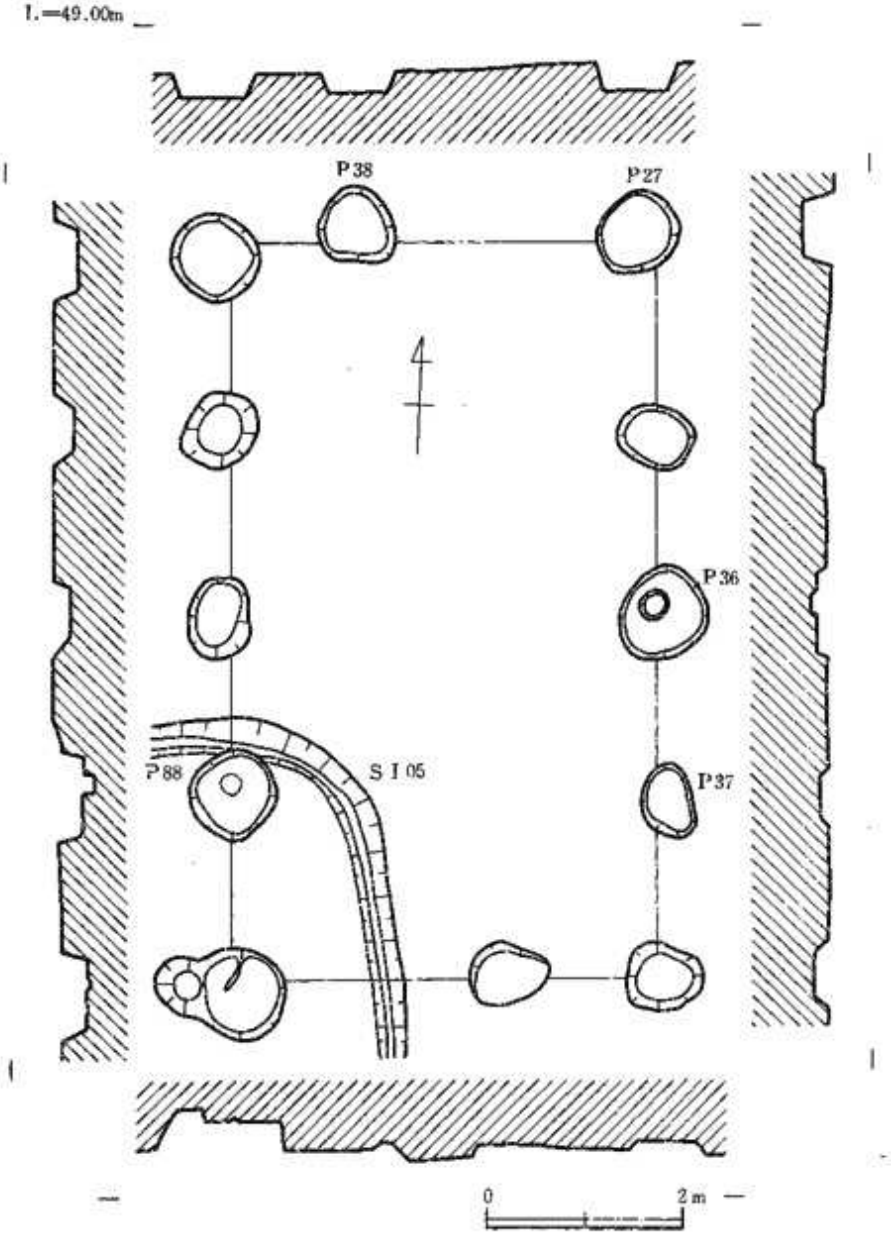
挿図23　ＳＢ10遺構図



挿図24　ＳＢ11遺構図



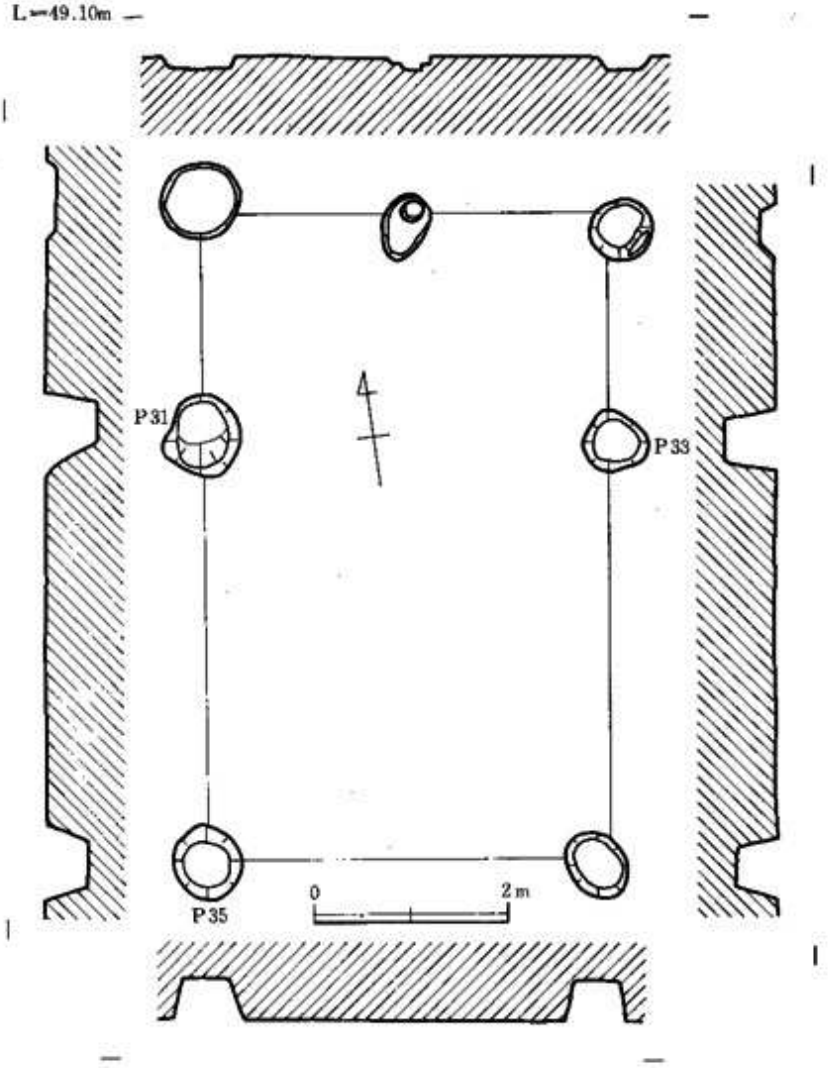
挿図25　ＳＢ12
遺構図



挿図26　SB13遺構図

SB13〔挿図26〕

桁行4間（7.44～7.60m）×梁行2間（4.35～4.36m）で桁行方向をN－4°－Wにとる建物。柱穴は径0.53～1.00m、深さ0.09～0.33mを測り、規模が大きい。西桁行柱穴はSI05を切っている。また、それぞれの梁行の柱間は間隔にバラツキが認められた。P27から土師器（甕）、P36から土師器（甕）・須恵器（坏）、P37から土師器（甕・高坏）、P38から器種不明土器が出土している。古墳時代初期～後期にかけての建物であろう。



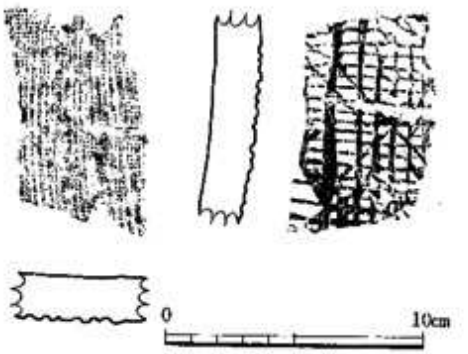
挿図27　ＳＢ14遺構図

ＳＢ14〔挿図27〕

桁行２間（6.49～6.84m）×梁行２間（4.07～4.33m）で、桁行方向をＮ－８°－Ｅにとり、本遺跡の高位置に所在している建物。柱穴は径0.57～0.85m、深さ0.08～0.56mを測るが、一部のものを除いて径・深さともに比較的規模の大きい建物である。また、桁行の柱間は等間隔でなく、南梁行の中間柱穴も欠く。

ＳＢ14出土遺物

Ｐ31から須恵器（坏）、Ｐ33から須恵器



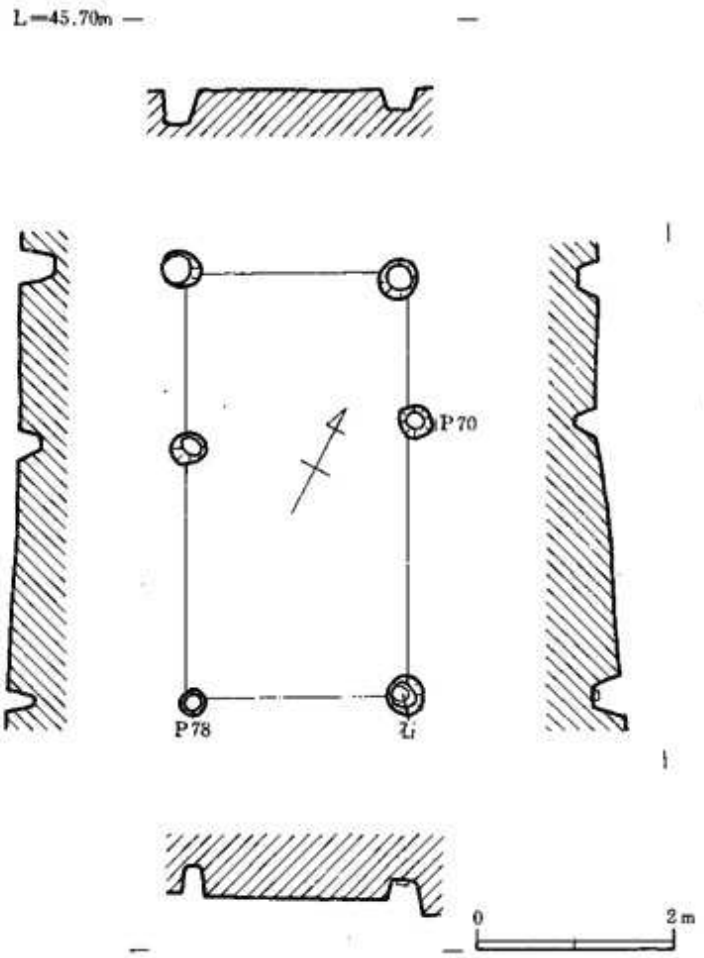
挿図28　ＳＢ14遺物実測図

(皿・坏)、P35須恵質(瓦)が出土している。

瓦〔挿図28、図版Ⅶ—12〕 須恵質の瓦片で、上面は格子目のタタキを施し、下面は布目痕が見られ、ナデ調整で一部を消している。出土遺物から平安時代の建物であろう。

ＳＢ15〔挿図29〕

桁行２間（4.28～4.47m）×梁行１間（2.16～2.26m）で桁行方向はＮ—27°—Ｗをとる。柱穴は円形で径0.24～0.41m、深さ0.18～0.35mを測る。北東桁行の北隅柱穴はＳＢ12の西桁行中間柱穴とそして南隅柱穴はＳＢ12の東桁行の南隅柱穴とそれぞれ共有する。また、南西桁行の北隅柱穴はＳＢ11の東桁行の南隅柱穴、そして中間柱穴はＳＢ12の西桁行の南隅柱穴とそれぞれ共有する。北東桁行の南隅柱穴は底石をもつ。P70から土師器（甕）、P78から器種不明の土器が出土している。古墳時代初頭の建物であろう。



挿図29　ＳＢ15遺構図

3　土　　坑（ＳＫ）

Ａ地区で１基検出したが、柱穴と判断したものの中で土坑と考えられるものもあったように思われる。

ＳＫ01〔挿図30、図版Ⅵ—２〕

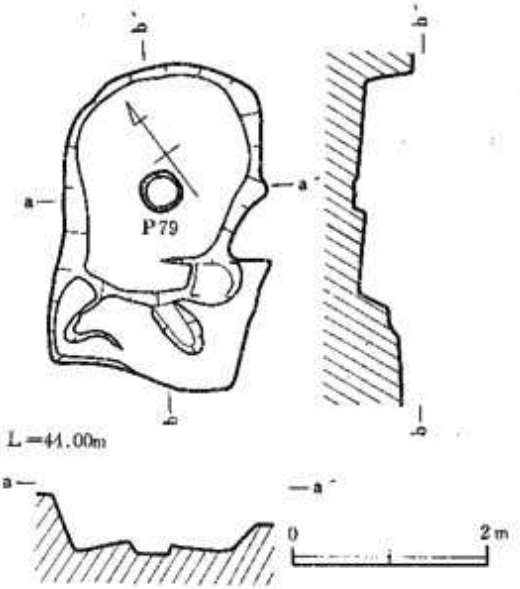
Ａ（Ｃ—３）地区の西部、ＳＩ01の南西側、ＳＢ03・04の中間に位置している。平面形は南西部が隅丸方形を呈し、北東部は不整形で長軸3.29m、短軸1.68m、深さ0.51mを測り主軸をＮ—33°—Ｅにとる。中央部でピットを検出した。

ＳＫ01出土遺物

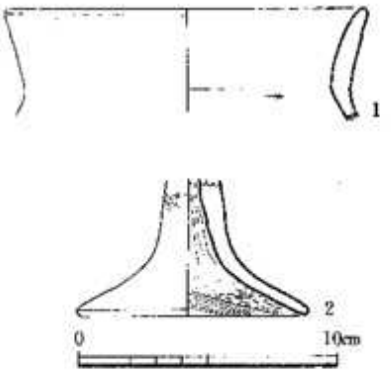
土師器の甕・高坏・壺等が出土しているが、図化できるものは（１・２）であり覆土から検出された。

甕〔挿図31－１、図版Ⅶ－13〕 １は口縁でやや外傾しながら直立気味に立ち上がる。内外面とも横ナデし、頸部以下内面は横方向にヘラ削りする。端部はつまみ上げて丸みをもつ。復元口径13.7cm。

高坏〔挿図31－２、図版Ⅶ－14〕 ２は脚部片で筒部が上方へすぼみ、裾部は大きく「ハ」の字状に開く。内面筒部はシボリ目、裾部は指圧痕・ハケ目が見られる。外面は筒部上半をハケ目調整し、赤色塗彩が施してある。また、脚端部が角張っている。復元底径8.7cm。



挿図30　ＳＫ01遺構図



挿図31　ＳＫ01遺物実測図

４　溝（ＳＤ）

Ｂ地区で１基検出したが、全体的にはっきりした溝状遺構は検出されず、検出した溝も竪穴住居跡の周溝と考えられる特殊遺構である。

ＳＤ01〔挿図32〕

Ｂ（Ｃ－４）地区の北部に位置し、ＳＢ08の北東側に所在している。径は0.10～0.20m、深さ0.04～0.06mを測る狭くて浅い溝で方形に区画するようなかたちで検出した。方形区画は長軸4.04m、短軸3.93mを測り、主軸をＮ－53°－Ｗにとる。溝内側（方形区画）に接したピットから高坏の坏部４個、脚部３個、頸部１個、甕片が多量に出土している。祭祀のために用いられた遺構であると思われる。また、南西部分が削られて消失しているので全容は不明である。

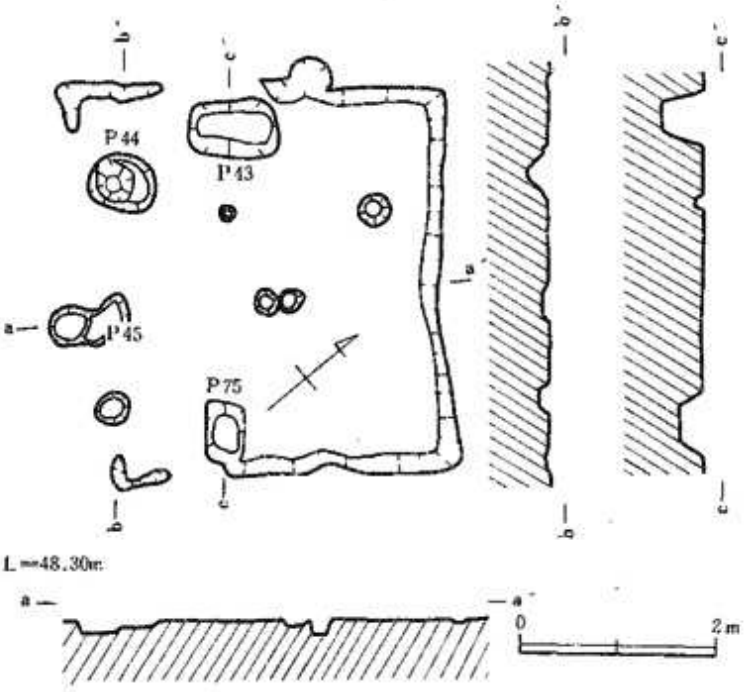
ＳＤ01出土遺物

土師器の甕・高坏等が出土した。溝からの出土遺物は極細片で、図化できたものはすべて方形区画内のピットからである。

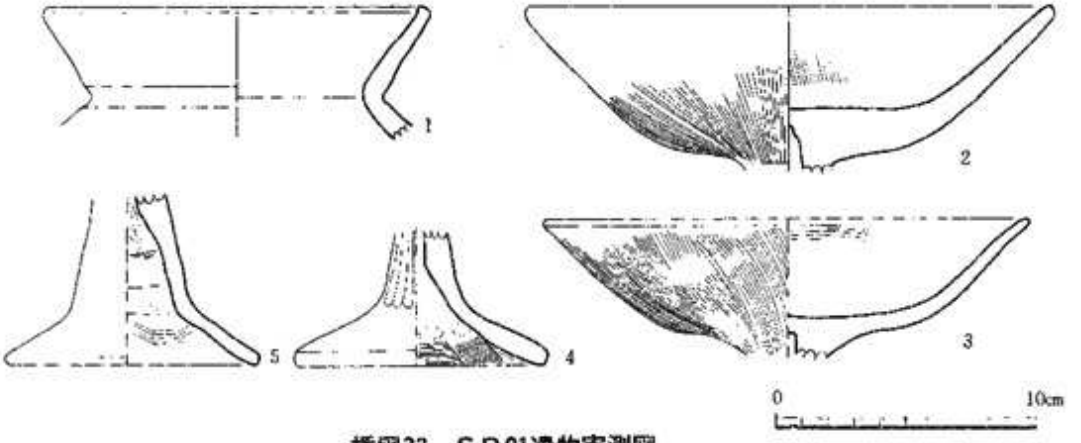
甕〔挿図33－１、図版Ⅶ－15〕 １は「く」の字状に外傾する口縁で頸部から端部にかけて立ち上がる。内外面横ナデし、端部をわずかに内側へつまみ出す。Ｐ43出土、復元口径14.3cm。

高坏〔挿図33—2～5、図版Ⅸ—1～4〕

2・3は坏部で2の坏内面底部は平坦で口縁部はゆるく内湾しながら立ち上がり、端部は丸くおさめる。3の坏内面底部は平坦で口縁部はゆるく内湾しながら立ち上がり、端部はやや外反する。筒脚部は欠損しており、外面坏底部中央に小孔がありいずれも差込式である。小孔の径は2が8



挿図32　ＳＤ01遺構図



挿図33　ＳＤ01遺物実測図

mm、3が11mmである。外面は筒部から坏部にかけて放射状にハケ目を施す。また、内外面ともに赤色塗彩を施している。P75出土、復元口径2が20.1cm。3が18.5cm。4・5は脚部で筒部から裾部にかけて「ハ」の字状に開く。筒部中央に小孔があり、径は4が6mm、5が10mmである。4は内面にラセン状のハケ目、指圧痕が観察され、外面は筒部をヘラ磨きし、赤色塗彩を施している。また、脚端部は角張る。P75出土、脚径9.5cm。5は筒部内面にシボリ目、裾部にハケ目が見られる。P43出土、脚径9.6cm。なお、これらの脚部は2・3と同一個体と思われる。

5 構　　列（ＳＡ）

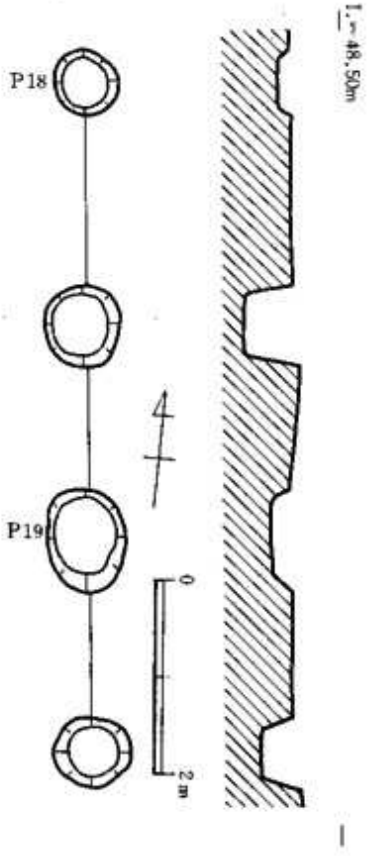
Ｂ地区で２基互いに平行するような形で検出され、主軸は、ほぼ真北方向をとる。

ＳＡ01〔挿図34〕

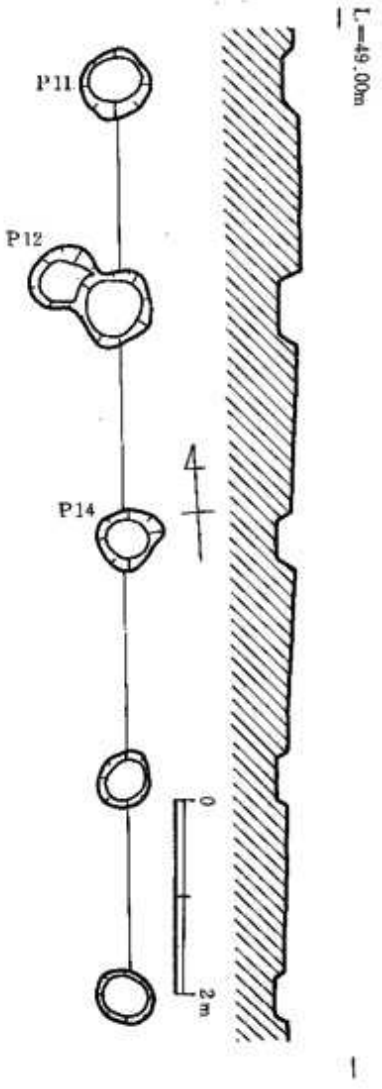
Ｂ（Ｆ－４）地区の南東部に位置し、ＳＩ05の南東側に４間（9.47m）分検出され、主軸をＮ－３°－Ｅにとる。柱穴は径0.52～0.83m、深さ0.09～0.20m を測り、柱間は等間隔で柱筋も揃っている。Ｐ11から土師器（甕）・須恵器（甕）、Ｐ12から土師器（甕）・須恵器（甕）、Ｐ14から土師器（坏）・須恵器（甕）が出土している。平安時代の建物であろう。

ＳＡ02〔挿図35〕

Ｂ（Ｅ－４・Ｄ－４）地区の南部に位置し、ＳＩ05とＳＩ06に挟まれるような形で３間（3.90m）分検出され、主軸をＮ－７°－Ｗにとる。柱穴は径0.71～1.05m、深さ0.11～0.52m を測り、かなり規模の大きいしっかりし



挿図35　ＳＡ02遺構図



挿図34　ＳＡ01遺構図

た柱穴である。P18から土師器（甕）・須恵器（坏）、P19から土師器（甕・坏）が出土している。平安時代の建物であろう。

6　遺構外の出土遺物

今回の調査では、耕土・各ピットなどからも相当量の遺物が検出された。その内、図化できたものを紹介する。

弥生土器

甕〔挿図36—1～4、図版X—1～4〕 1は「く」の字状の口縁で端部は外傾しカットされている。内面はハケ目を施し、外面はナデている。耕土出土、復元口径21.6cm。2は外反する複合口縁で端部をつまみ上げている。内面ヘラ削りし、外面は沈線をナデ消している。P78出土、復元口径13.8cm。3は複合口縁で端部は丸みをもつ。内面調整不明で外面は7条の櫛描平行沈線を施す。P20出土、復元口径18.7cm。4は複合口縁で外傾気味に立ち上がり、端部は丸くおさめる。内面は粗いナデで外面は櫛状工具による平行沈線を施す。耕土出土、復元口径20.3cm。1は中期、2・3は後期後半頃のものであろう。

土 師 器

甕〔挿図36—5・6、図版X—5・6〕 5は頸部から「く」の字状に立ち上がる複合口縁で、端部は丸くおさめ稜はするどい。内外面風化が著しく調整不明である。P20出土、復元口径14.2cm。6は頸部が「く」の字状に開き、口縁端部は内面に稜をもち肥厚している。内外面調整不明である。P20出土、復元口径15.9cm。

高坏〔挿図36—7、図版X—7〕 受部で体部から口縁部にかけて直線的に上外方へのび、端部をつまみ出す。内面ヘラ磨きで外面はナデている。耕土出土、復元口径16.8cm。

平安時代の須恵器

蓋〔挿図36—8・9、図版X—8・9〕 8は平らな天井部をもち、口縁端部を外側につまみ出す。内面横ナデし、外面は左方向のヘラ削りを施す。耕土出土、復元口径12.8cm。9は天井部が平坦で口縁端部は丸くおさめる。内外面ナデている。耕土出土、復元口径13.7cm。

坏〔挿図36—10～15、図版X—10～15〕 10・11は貼付高台をもつ。10は底部から体部にかけて内湾気味に外傾する。内外面ナデ調整。耕土出土、復元底径8.3cm。11は底部から体部に向かって内湾気味に立ち上がる。内外面ナデ仕上げ。P42出土、復元底径8.6cm。12は外傾して端部は先細る。内外面ナデている。耕土出土、復元口径19.4cm。13は底部から体部にかけて外傾し、口縁端部はやや外反しながら丸くおさめる。内外面ナデている。耕土出土、復元口径11.2cm。14は底部があがりぎみで体部にかけて湾曲気味に立ち上がる。内外面粗いナデ調整。P5出土、復元底径5.8cm。15は底部があがりぎみの平高台で体部にかけて湾曲気味に立ち上がる。内外面ナデ調整し、底部外面に回転糸切りがみえる。P5出

土、復元底径6.0cm。12・13・14・15は初期頃のものであろう。

皿〔挿図36—16～18、図版X—16～18〕 16は底部から口縁部にかけて外傾しながら立ち上がり、端部は外反し丸くおさめる。内外面ナデ調整し、底部外面は回転糸切りで仕上げる。耕土出土、復元口径12.5cm。17はやや上げ底ぎみの平底で、底部から口縁部にかけて大きく外傾し端部を丸くおさめる。内外面やや磨滅している。P5出土、復元口径13.9cm。18はやや上げ底ぎみの底で、底部から口縁部にかけて大きく外傾し、端部が外反する。外面は剝離が著しい。耕土出土、復元口径12.3cm。16・17・18は初期頃のものであろう。

甕〔挿図36—19・図版X—19、挿図37—20〕 19は大きく外反し、口縁端部を方形につまみ出す。端部内外面に稜がみられる。内外面ナデている。耕土出土、復元口径38.7cm。20はやや内湾気味に外傾し、口縁端部が肥厚する。外面に2段の波状文と1条の沈線を施している。耕土出土、復元口径31.6cm。

奈良～平安時代の土師器

甕〔挿図37—21・22、図版X—21・22〕 21は体部から口縁部にかけて湾曲し外反する。端部は丸くおさめる。口縁部内外面をナデ調整。耕土出土、復元口径12.9cm。22は大きく外反する口縁で、端部は丸くおさめる。内面は一部ハケ目を施し、外面は粗いナデ仕上げ。P42出土、復元口径36.6cm。

坏〔挿図37—23、図版X—23〕 ゆるく内湾気味に外傾しながら立ち上がる。口縁端部がやや外反する。内外面横ナデ仕上げ。P6出土、復元口径13.1cm。

奈良～平安時代の須恵器

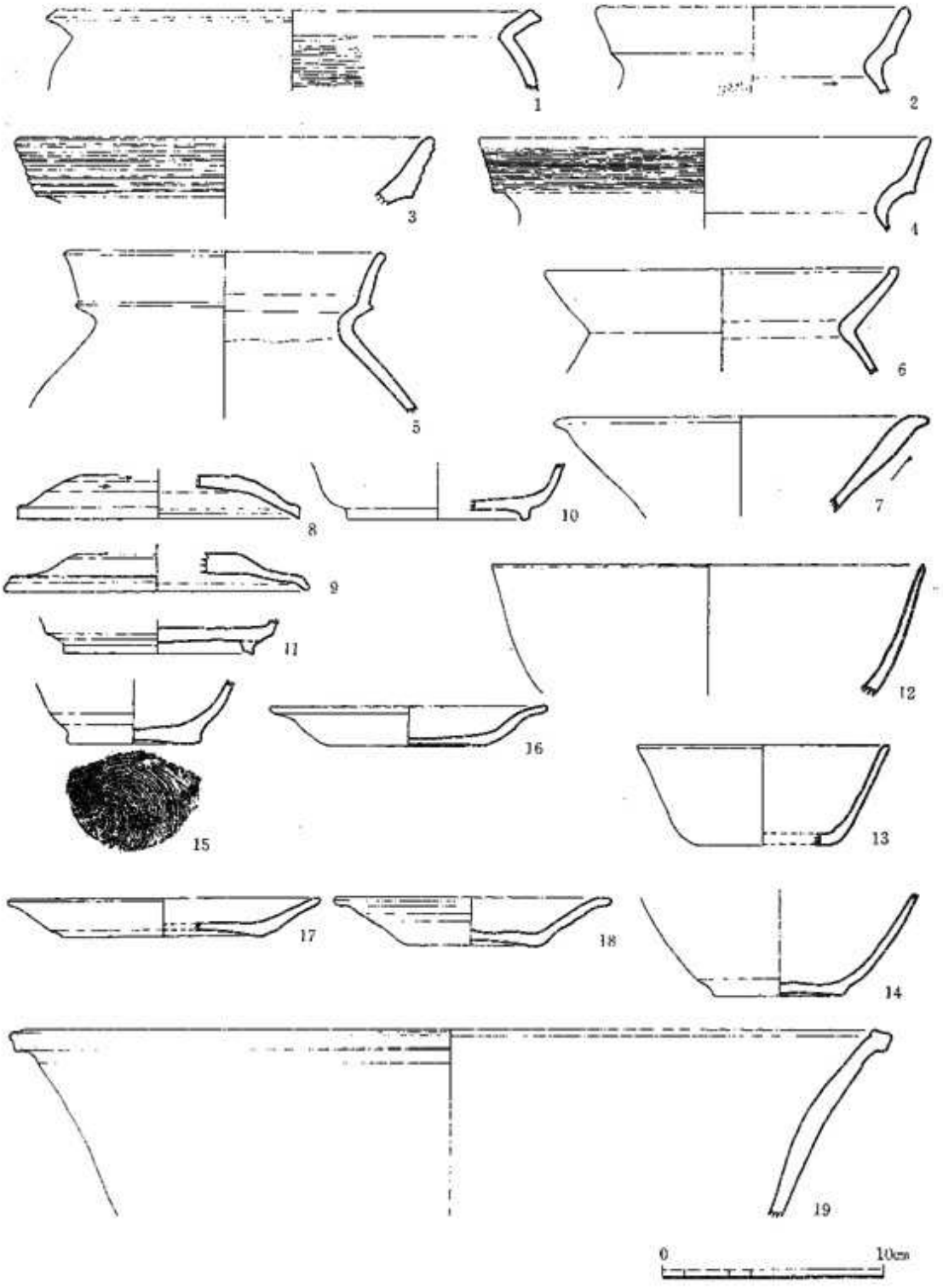
壺〔挿図37—24、図版Ⅳ—6〕 平底で薄く、湾曲しながら直立気味に立ち上がり、口縁部がゆるく内湾する。底部内面に指頭圧痕が残り、全体的には調整不明。P74出土、復元口径5.0cm。復元底径10.2cm。

鉢〔挿図37—25〕 逆「ハ」の字状に立ち上がり、口縁端部上面は凹んでいる。内外面ナデ仕上げ。P60出土、復元口径34.3cm。

その他の遺物

土錘〔挿図37—26、図版X—26〕 中心部に楕円形の孔をあけた管状の小型のものである。P6出土、長さ5.6cm。孔径0.9cm。重さ35.1g 。

瓦〔挿図37—27、図版X—27〕 土師質で上面は格子目のタタキを施し、下面布目痕がみられナデ調整で一部を消している。P76出土。



挿図36　出土遺物実測図（その１）

Ⅴ まとめ

今回の調査では、竪穴住居跡を中心に掘立柱建物、土坑、溝、柵列を検出した。

竪穴住居跡は6棟検出したが、大きく2タイプ（A・B）に分けることが出来た。

Aタイプは規模が約5×3m以下で主軸をN－46～60°－Eにとるもの（SI01・03・06）。

Bタイプは規模が約5×5m以上で主軸をN－1～10°－W・N－10°－Eにとるもの（SI02・04・05）。

ただし、SI01・04・06は全容不明のため推定である。

さらにAタイプは平面形が隅丸長方形でピット数も少ないもの。

Bタイプは平面形が隅丸正方形でピット数も多く、住居中央部には特殊ピットをもつもの。

以上のことや、出土遺物などからみて、Aタイプは古墳時代初頭～終末頃のもので、Bタイプは弥生時代終末～古墳時代初頭のものであることが窺える。

掘立柱建物は15棟検出したが、棟方向、切り合い関係から大きく5タイプ（A・B・C・D・E）の建物群に分けることが出来た。

Aタイプは棟方向をN－47～68°－Eにとるもの（SB01・03）。

Bタイプは棟方向をN－27～51°－Wにとるもの（SB02・04・15）。

Cタイプは棟方向をN－62～82°－Wにとるもの（SB05・07・08・09・10）。

Dタイプは棟方向をN－83°－E・N－4°－Wにとるもの（SB06・13）。

Eタイプは棟方向をN－8～27°－Eにとるもの（SB11・12・04）。

そして時期は出土遺物などでAタイプは平安時代終末、Bタイプは弥生時代終末～古墳時代初頭、Cタイプは古墳時代終末～平安時代初頭、Dタイプは古墳時代初頭～終末、Eタイプは平安時代のものであると思われる。以上のことから郷原遺跡における掘立柱建物の変遷はB→D→C→E→Aというように移り変わっていったのではないかと考えられる。

その他の遺構（土坑・溝・柵列）の時期については、主軸方位、切り合い関係、出土遺物などで土坑が平安時代終末、溝が弥生時代終末～古墳時代、柵列が平安時代であると思われる。

全体的に遺構の性格・時期・移り変わり等、決定づけることは出来ないが共存関係をみると以下のように存在していたことが推測される。

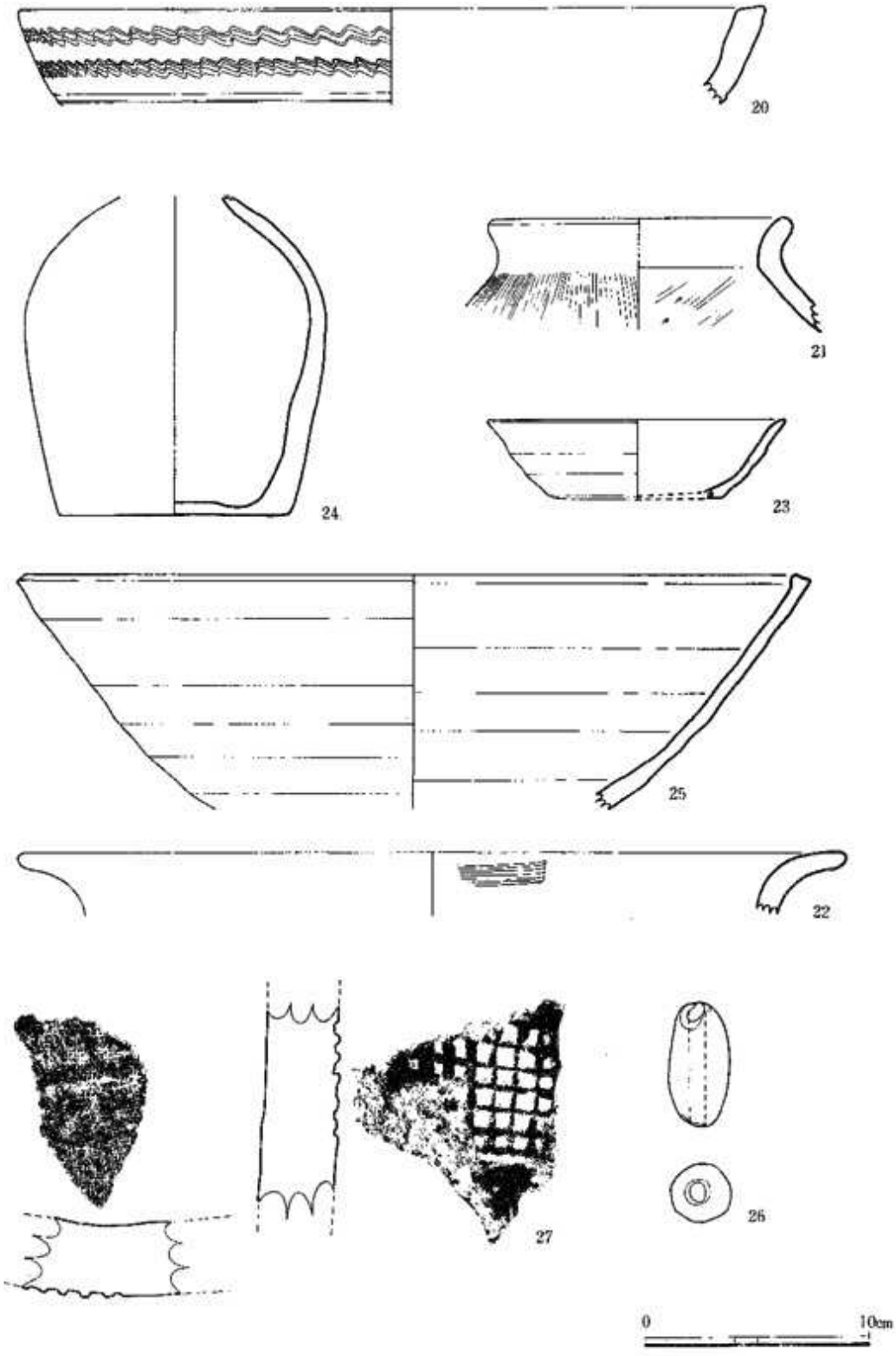
弥生時代終末～古墳時代初頭にはSI02・04・05、SB02・04・05、SD01。

古墳時代初頭～終末にはSI01・03・06、SB06・13。

古墳時代終末～平安時代初頭にはSB05・07・08・09・10。

平安時代にはSB11・12・14、SA01・02。

平安時代終末にはSB01・03、SK01。



挿図37　出土遺物実測図（その２）

今回の調査では、弥生時代終末～平安時代にかけての集落の一端が多少明らかになったが、隣接している前田遺跡（15～16世紀の集落跡）と関連づけて考えてみると、人々の生活の場は郷原古墳群が位置している縁辺からなだらかな地形に沿って三谷川南岸（扇状地）に至る場所に移っていったことが推測されるであろう。いずれにしても、郷原部落周辺は古くから人が住みつき、今日に至っていることが判明した。

註１　久保穣二朗氏より御教示を得た。

註２　鳥取県下において、弥生時代後期後半頃の横方向のヘラ削りは「逆時計回りの方向」（単に、削りの方向であって、削りの進行方向までは確認していない。）が多いように観察している。さらに、口縁部外面の櫛状工具などによる平行沈線は回転台を利用して、「時計回り方向」（進行方向も含めた方向）に施紋することが通例（久保氏の観察結果にもとづく。久保氏は東伯町の「大峰遺跡」・江府町の「岩屋ヶ成遺跡」・船岡町の「奈免羅・西ノ前遺跡」から出土した口縁部が完全に残っている甕・壺を観察して、時計回り方向と確認している。）である。また、肩部外面の貝殻腹縁による押し引き状の波状紋（押圧しながら施紋）は「逆時計回り方向」（進行方向も含めた方向）に施紋（久保氏は上記三遺跡の土器を観察して結論づけており、また、沈線紋の原体は大きくベンケイガイとサルボウガイ・アカガイの二タイプに分けられるということである。）する。２の土器のヘラ削りは「時計回りの方向」に施している。また、完形品ではないので、いちがいには言えないが、口縁部外面の平行沈線は「逆時計回り方向」に施紋しているように観察できる。かつ、肩部外面の貝殻腹縁による押圧紋の傾き（右下り）もこの時期のものと比較すると「逆」である。２の土器はこの時期の各種施紋方向がすべて「逆」方向を取っており、この土器の製作者が「左ききき」の結果、そのような現象が土器に反映されたものと考えられる。

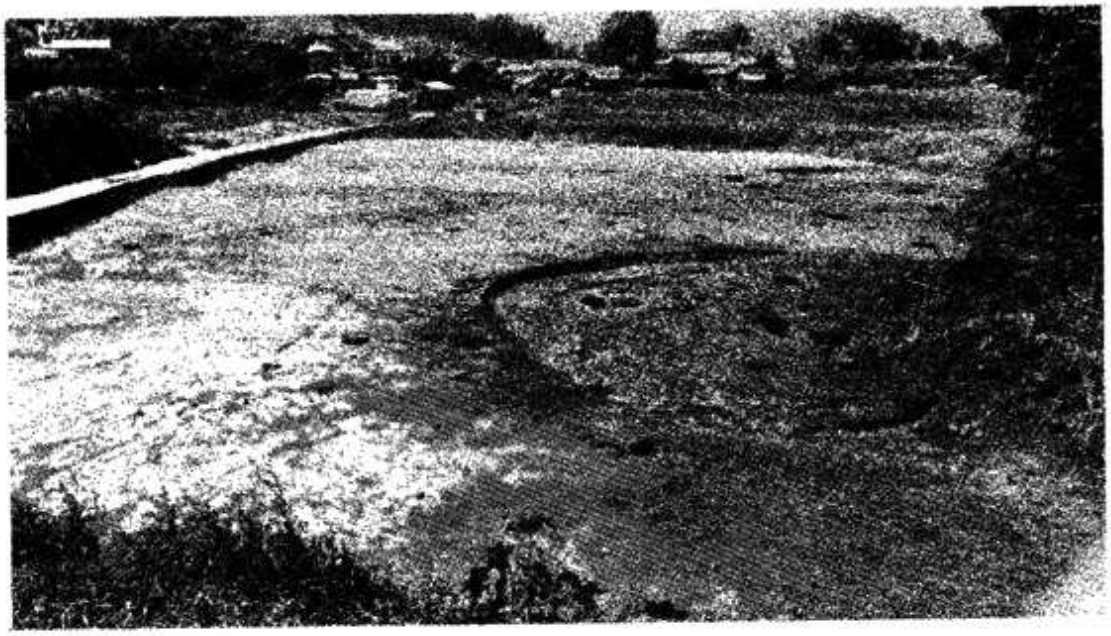
遺構名	番号	主軸方位	平面形	規模（m）長軸×短軸－深さ	側溝（m）幅－深さ
竪穴住居跡	SI01	N－60°－E	隅丸方形(推定)	5.13×2.10－0.17	なし
	SI02	N－10°－W	隅丸方形	7.56×7.54－0.52	なし
	SI03	N－57°－E	不整形	5.18×3.10－0.18	なし
	SI04	N－1°－W	隅丸方形	8.14×8.00－0.23	内溝0.20－0.05 外溝0.30－0.04
	SI05	N－10°－E	隅丸方形	5.03×5.00－0.18	0.33－0.06
	SI06	N－44°－W	隅丸方形(推定)	4.23×2.08－0.14	なし
土坑	SK01	N－33°－E	南西側(隅丸方形) 北東側(不整形)	3.29×1.68－0.51	－
溝	SD01	N－53°－W	方形	4.04×3.93－0.04～0.06	－

遺構名	番号	主軸方位	規模(間)	桁行(cm)	梁行(cm)
掘立柱建物	SB01	N－68°－E	2×1	394（183－211）(北西) 403(189－214)(南東)	235(北東) 238(南西)
	SB02	N－51°－W	2×1	380(184－196)(北東) 351（162－189）(南西)	213(北西) 232(南東)
	SB03	N－47°－E	2×1	355(162－193)(北西) 354(169－185)(南東)	172(南西) 184(北東)
	SB04	N－42°－W	2×1	382(196－186)(北東) 394(221－173)(南西)	232(北西) 242(南東)
	SB05	N－82°－W	2×1	291(139－152)(北) 281(132－149)(南)	208(西) 208(東)
	SB06	N－83°－E	1×1	312(北) 292(南)	224(西) 226(東)
	SB07	N－67°－W	2×1	282(130－152)(北東) 286(140－146)(南西)	193(北西) 194(南東)
	SB08	N－62°－W	2×1	419(219－200)(北東) 429（243－186）(南西)	246(北西) 256(南東)
	SB09	N－81°－W	2×2	408(194－214)(北) 442(228－214)(南)	327(178－149)(西) 357(209－148)(東)
	SB10	N－76°－W	4×3	435(204－231)(北) 668＋(157)(225－214－229＋(157))(南)	549(西) 352＋(？)(166－186＋(？))(東) ？(東)
	SB11	N－19°－E	2×1	590(285－305)(西) 601(286－315)(東)	236(北) 201(南)
	RB12	N－27°－E	2×1	468(195－273)(西) 442(224－218)(東)	306(北) 338(南)
	SB13	N－4°－W	4×2	760(178－192－172－218)(西) 769(212－171－203－183)(東)	435(145－290)(北) 436（278－158）(南)
	SB14	N－8°－E	2×2	684(230－454)(西) 649(218－431)(東)	433(218－215)(北) 407(南)
	SB15	N－27°－W	2×1	447(183－264)(南西) 428(146－282)(北東)	226(北西) 216(南東)
柵列	SA01	N－3°－E	4	947(232－242－247－226)	
	SA02	N－7°－W	3	390(149－115－126)	

表1　郷原遺跡遺構一覧表

図　　版

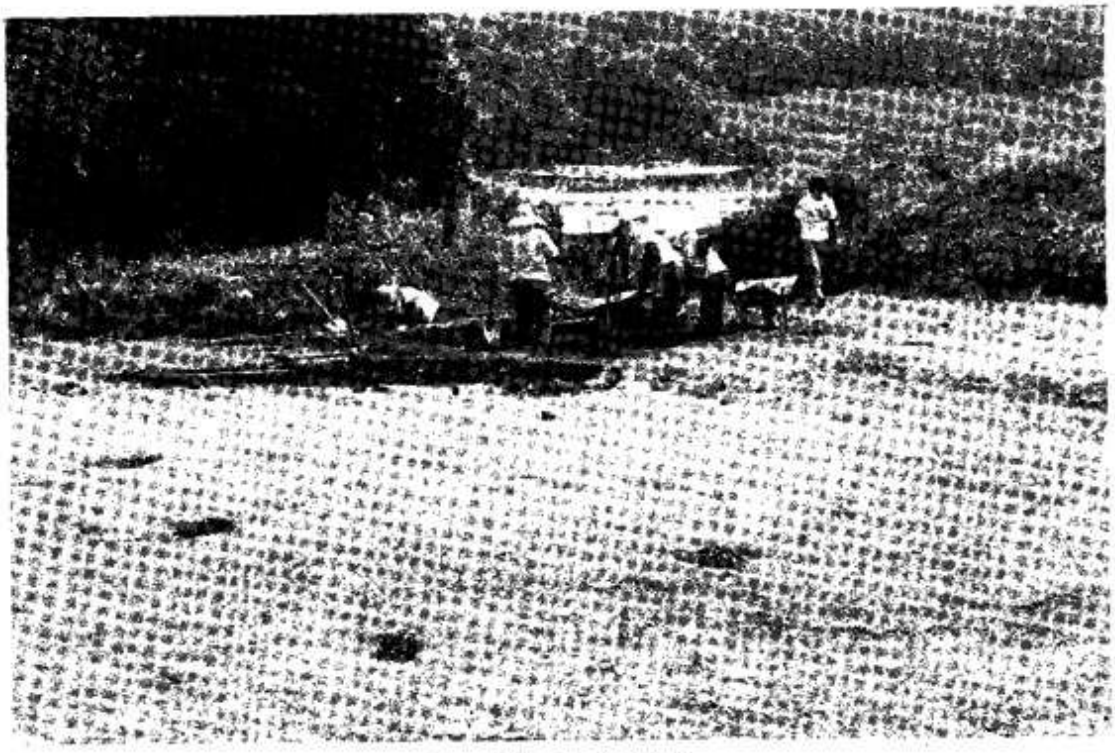
（Ⅰ～Ⅹ）



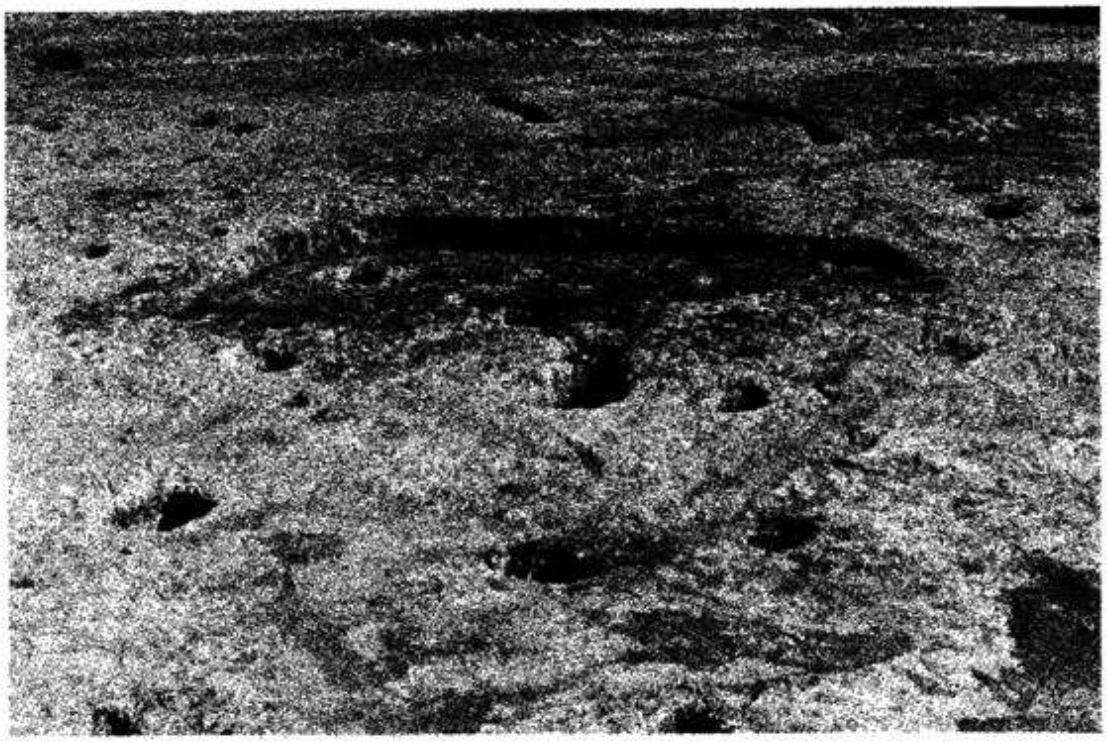
1．遺跡全景（A地区東から）

2．遺跡全景（B地区南東から）

1．遺跡周辺風景（南東から）

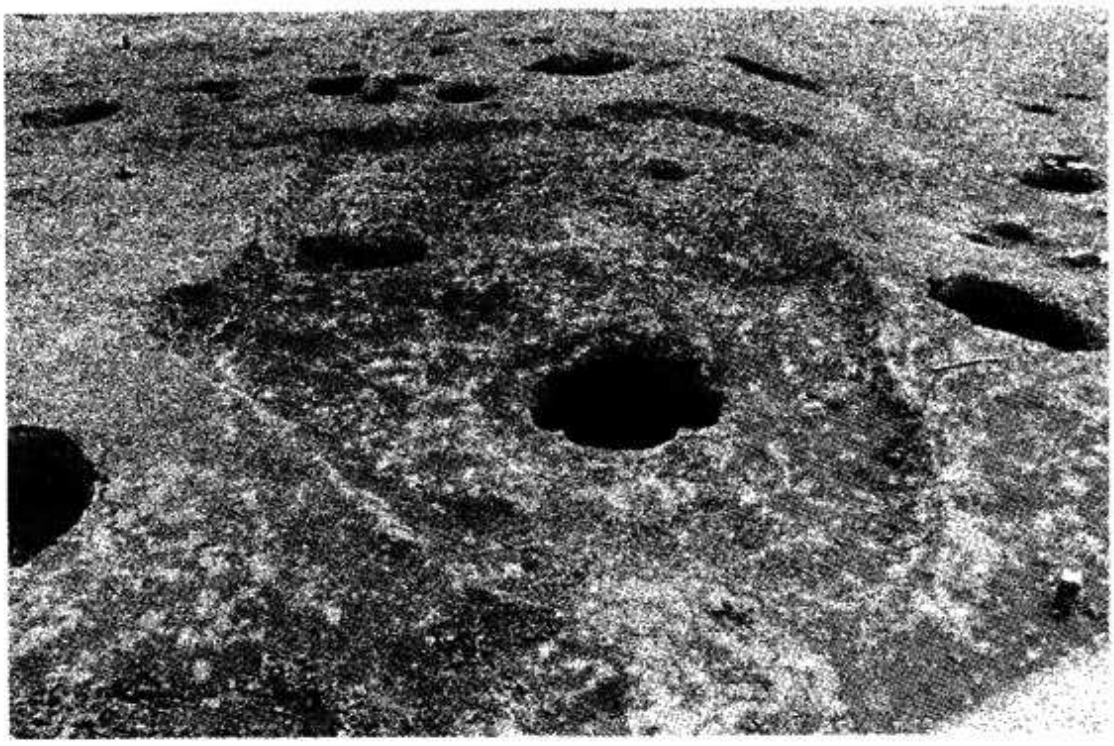


2．発掘作業風景（A地区）

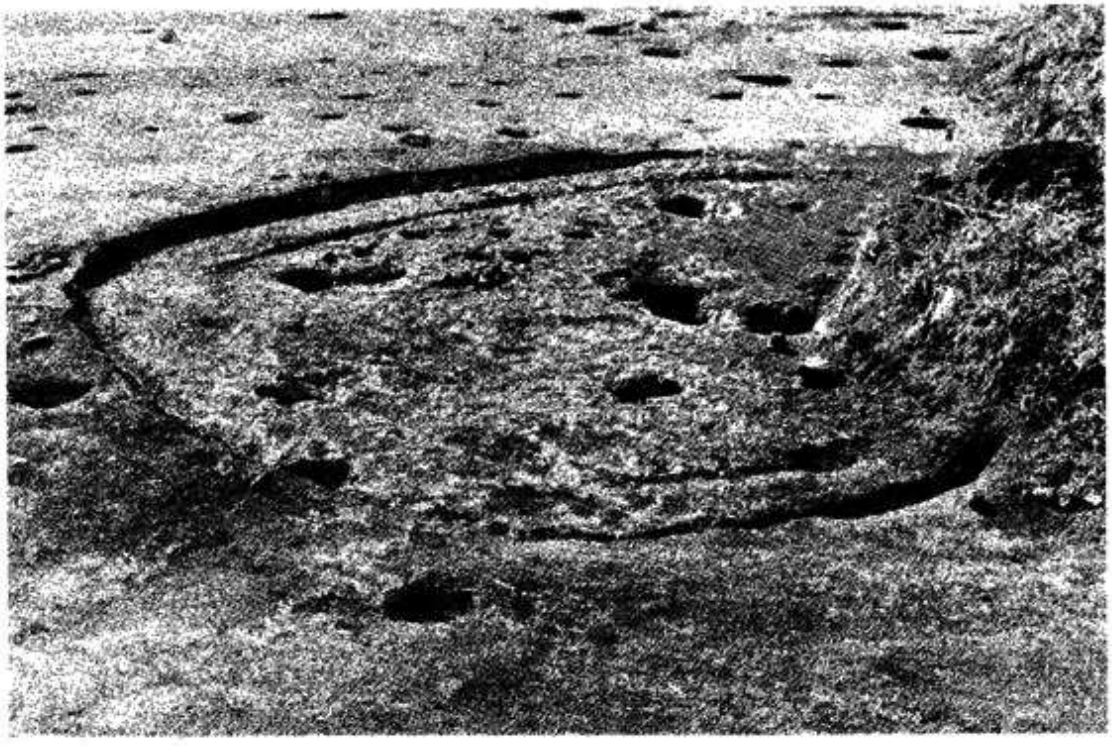


1．S I 01（北西から）

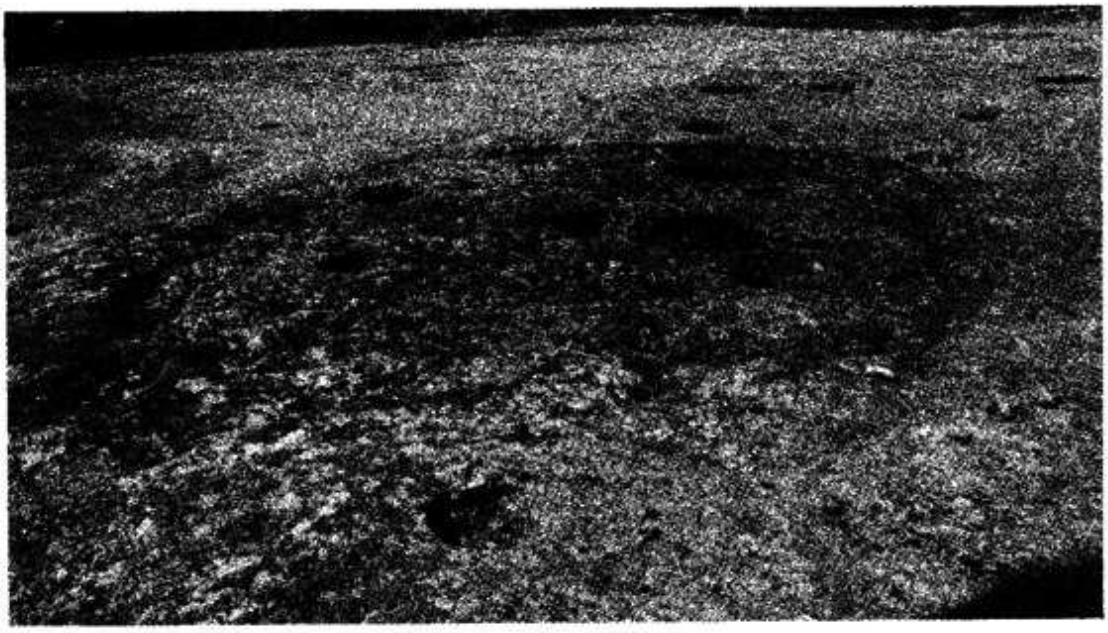
2．S I 02（東から）



1．S I 03（北から）



2．S I 04（東から）



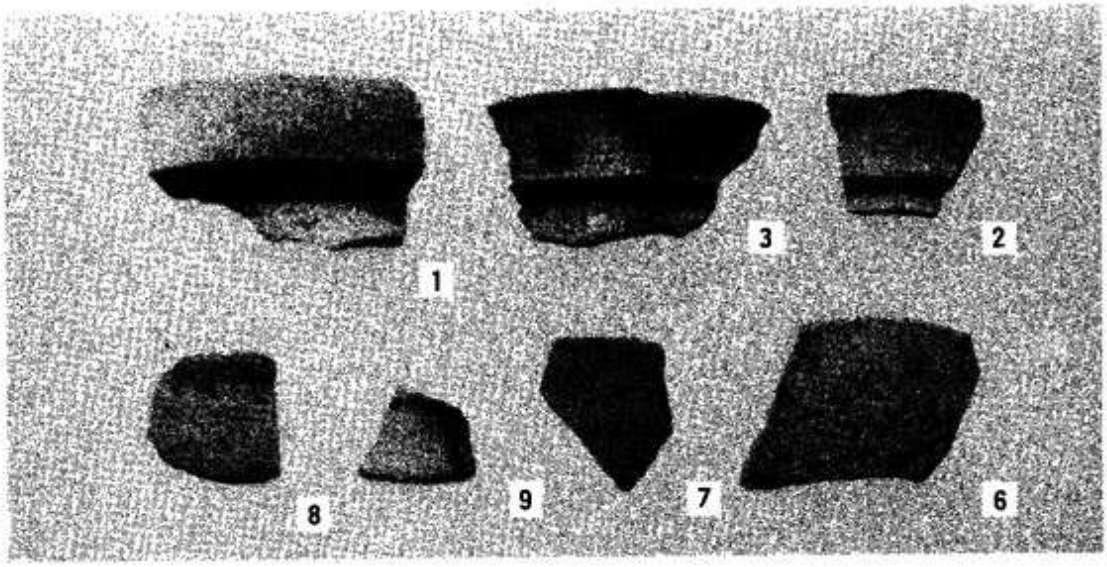
1．S I 05（南から）

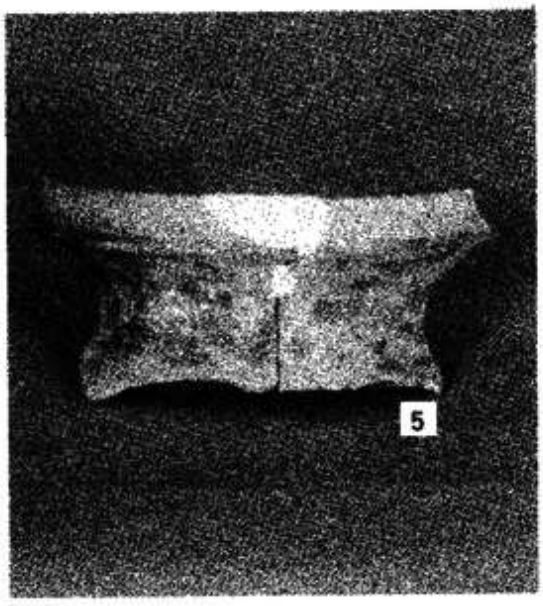
2．S I 06（東から）

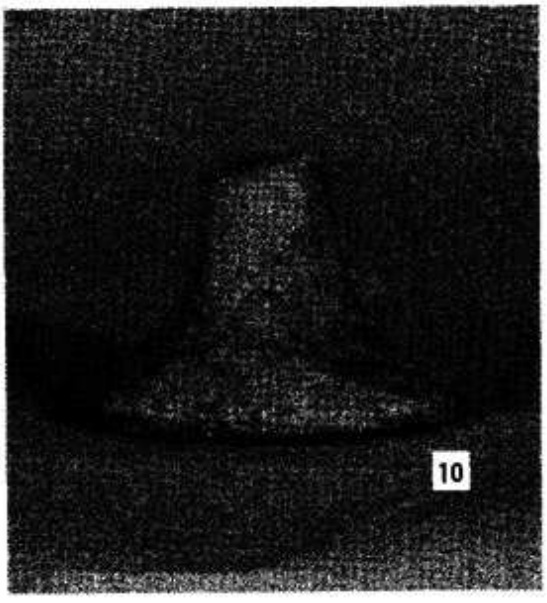
1．SB04（南東から）

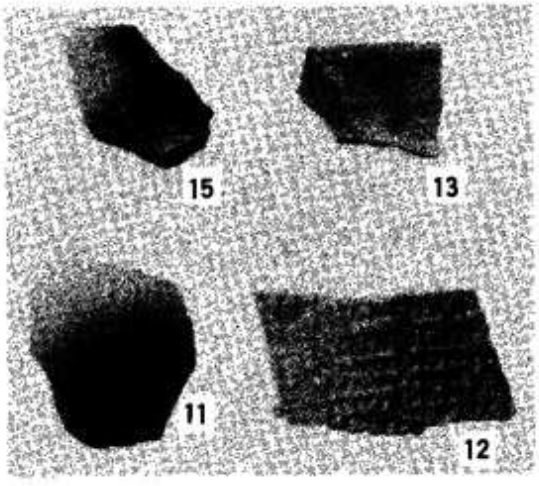
2．SK01（北西から）

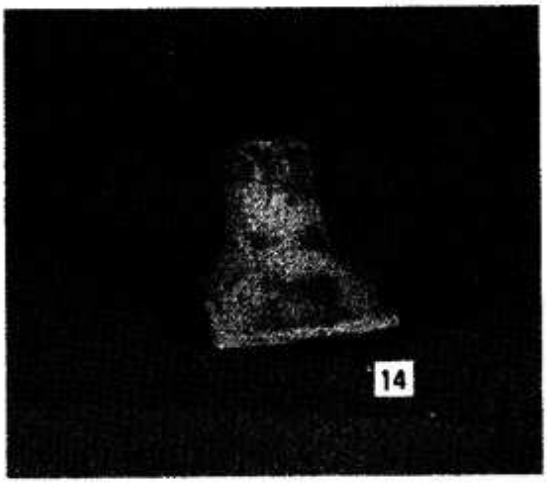
図版Ⅶ 出土遺物1



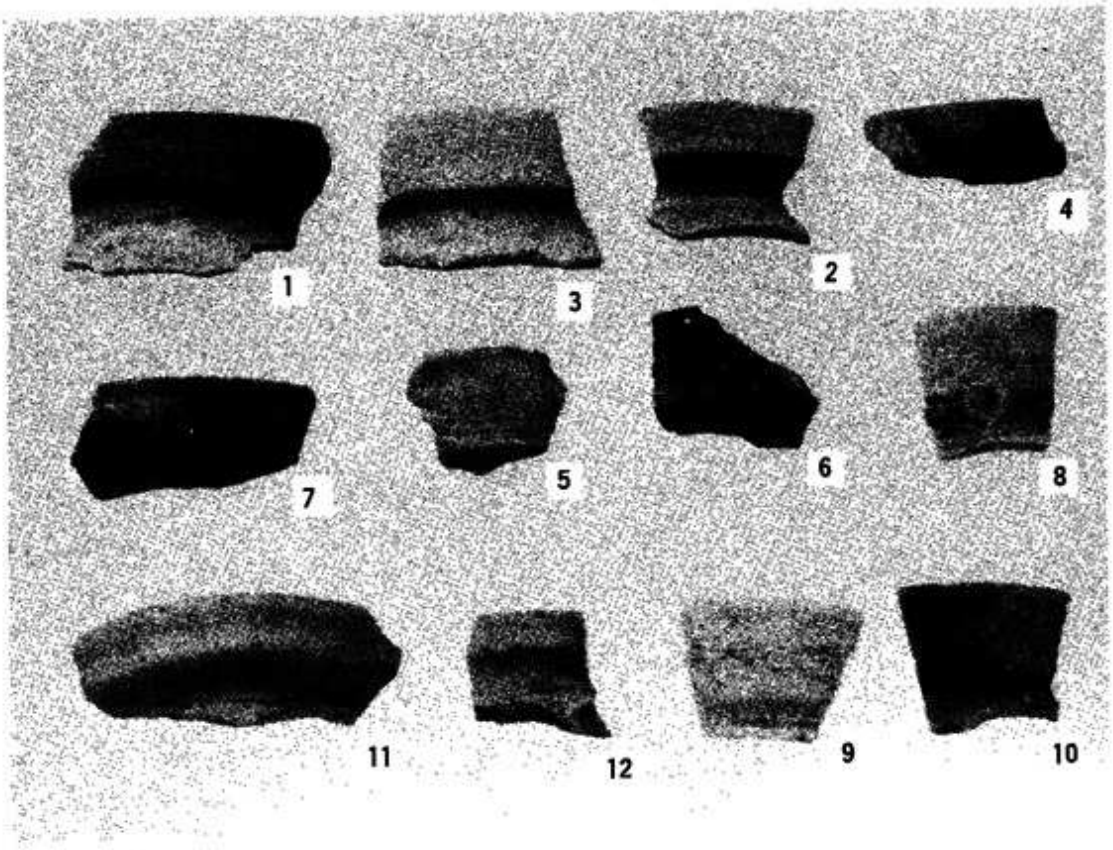


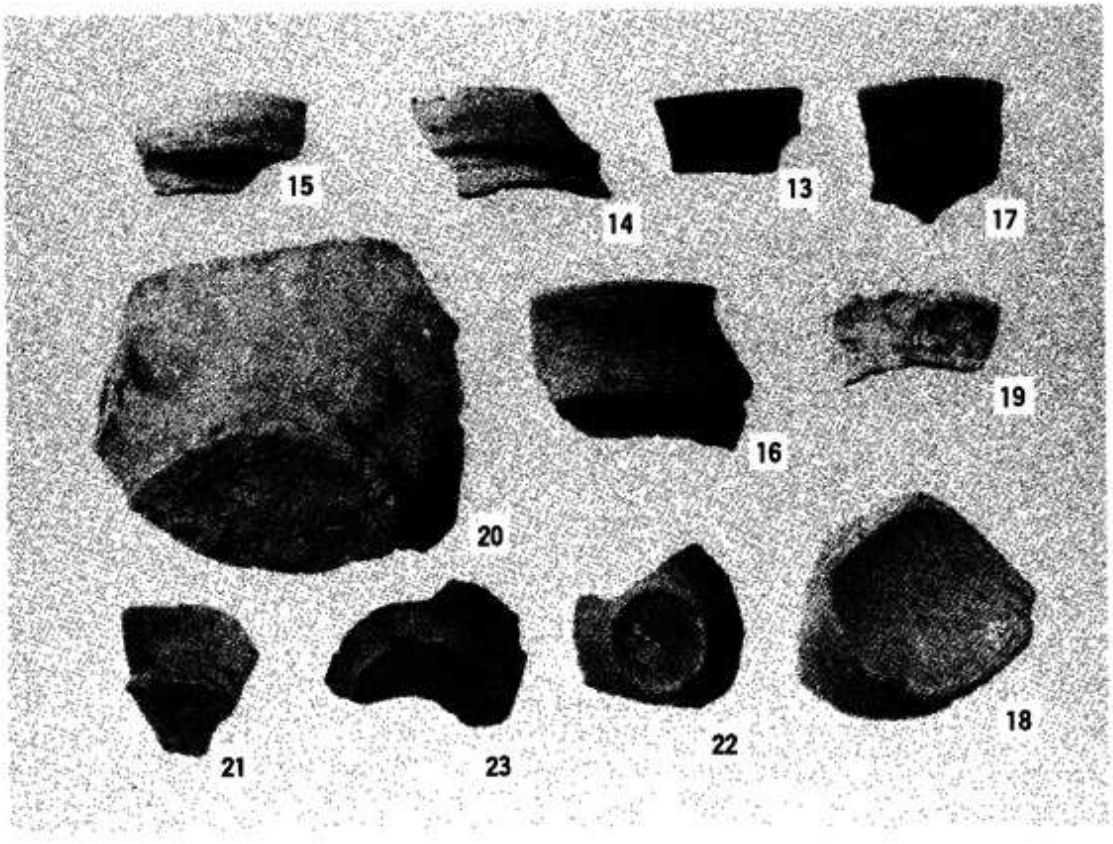




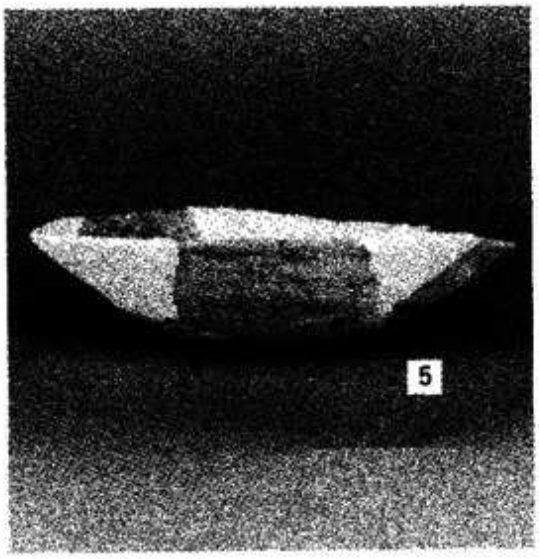


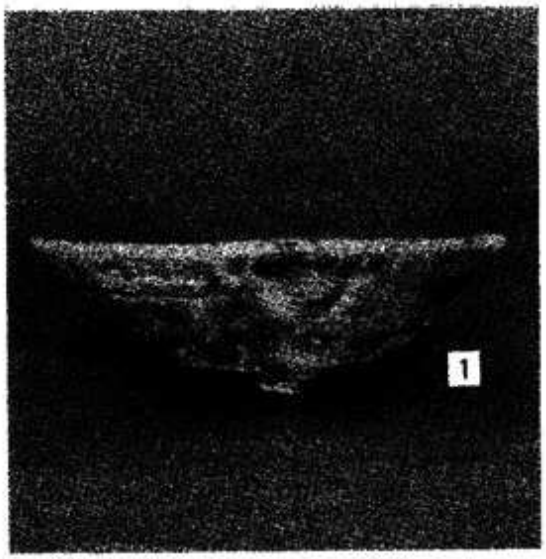
図版Ⅷ 出土遺物2

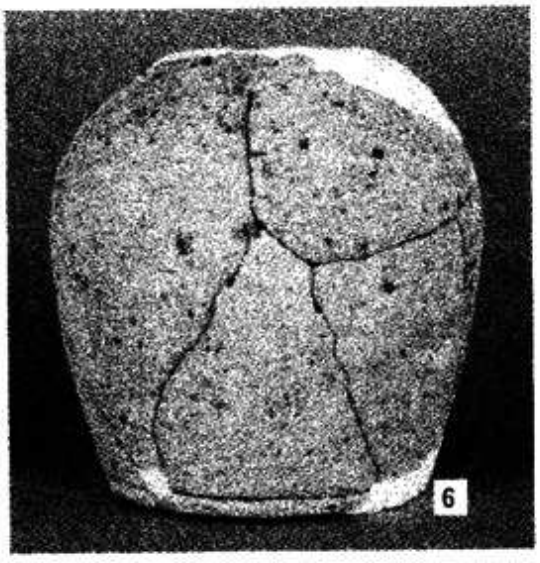


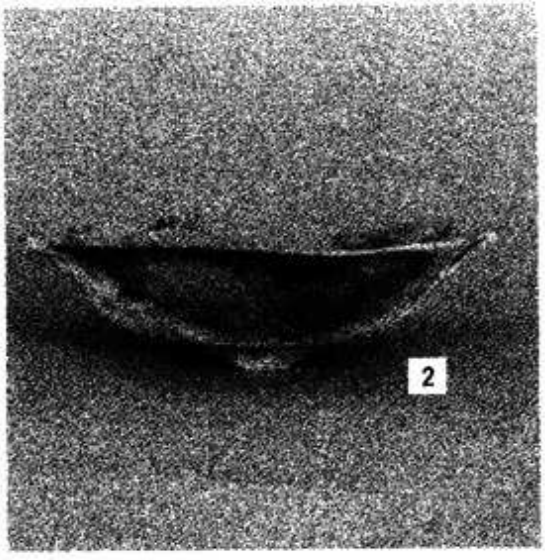


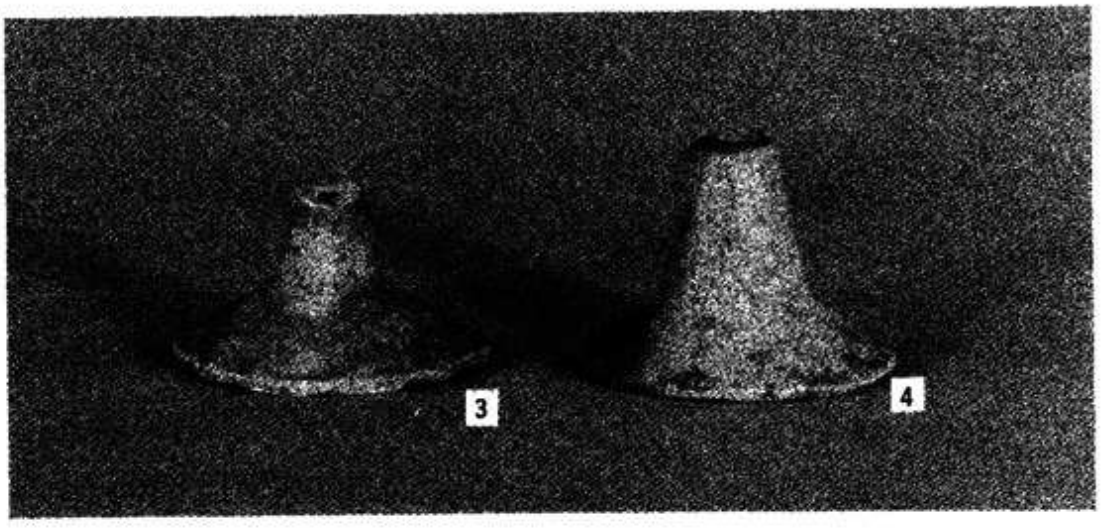
図版Ⅸ 出土遺物3



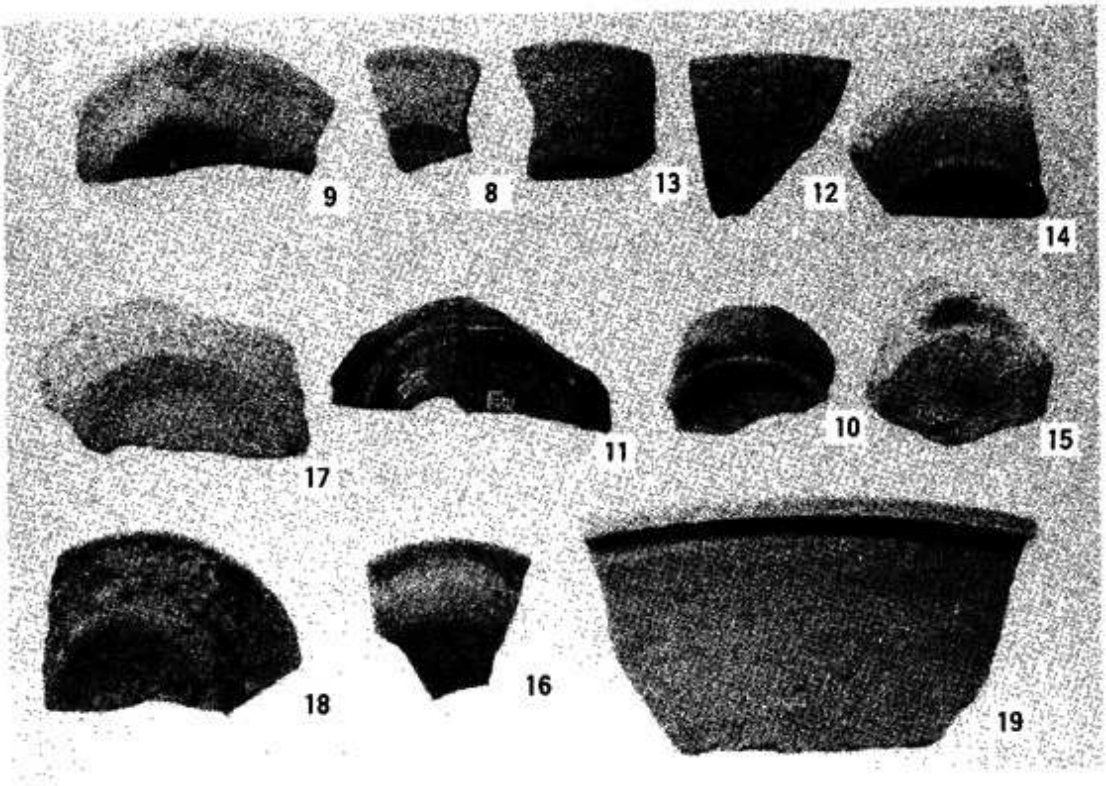


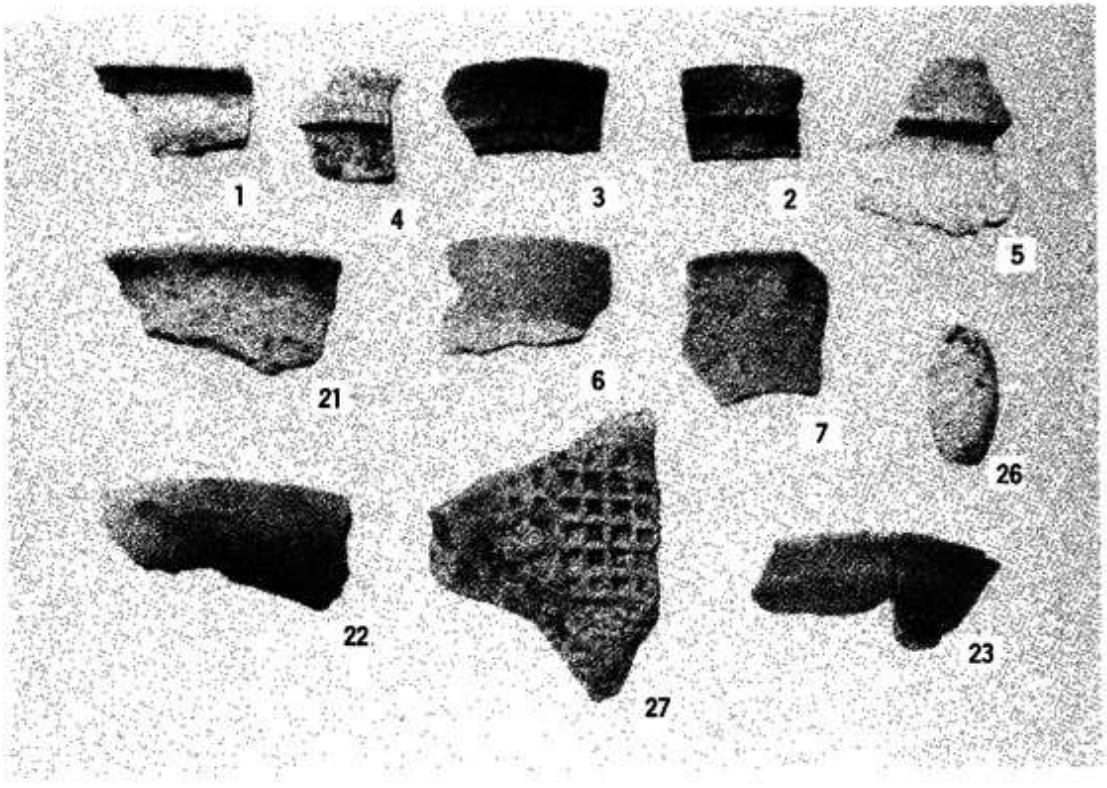






図版X 出土遺物4





郷原遺跡発掘調査報告書

発行日　1986年（昭和61年）3月

発行者　河原町教育委員会

〒680—12
鳥取県八頭郡河原町大字渡一木277-1

TEL（08588）5—0011

印　刷　谷　岡　印　刷

〒680 鳥取市元町126

TEL（0857）26—2001